主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2012 graph magazine vol.25

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol.25

メッセージ

4 主の願い　ゴットホルド・ベック

連載第6回

24 神と共に歩む人生　ヴィルヘルム・ブッシュ

5人の証し

50 イエス様の平安をいただいて　岩下淳一

58 すべてのものをいただいています　岩下由希子

66 喜びのうちに天国へ　父の救いの恵み　高山洋子

76 結婚式でのあかし　蔡健昇

84 結婚式でのあかし　会沢灯

94 キリスト集会へのご案内

96 集会の出版物



主の願い

ゴットホルド・ベック

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

（2ペテロ　3・9）

イエス様は何を望んでおられるのでしょうか。主イエス様の心からの願いとはいったい何でしょうか。みことばによると、主は、ひとりも滅びることがないようにと願っておられます。

事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。

（ヨハネ　6・40）

父なる神の願いは、イエス様を信じる人々がみな永遠のいのちを持つことです。神様は人間を救うために、ご自分がもっとも愛されたお方、御子イエス様を世界にお与えになったのです。

ところで、私たちの心の願いも主と同じものになっているでしょうか。もしそうでないとしたら、その人は怠惰のそしりを免れないでしょう。イエス様はご自分と願いを同じくする者を捜しておられます。

ガリラヤ湖のほとりを通られると、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」すると、すぐに、彼らは網を捨て置いて従った。

（マルコ　1・16～18）

イエス様はガリラヤ湖畔でシモンをご覧になられました。はじめてシモンをご覧になったとき、イエス様は彼を特別に良い人間と思われたわけではありませんでした。シモンはもう一つ「ペテロ」という名前をもっていたのですが、「シモン」という名前は人間の弱さを表しています。事実、その後シモン・ペテロは十字架にかけられるイエス様を、鶏の鳴く前に三度も「知らない」と否定したのです。

しかしイエス様は、ペテロが後に五旬節のとき、すばらしい説教をするようになることを知っておられました。イエス様は人間のうわべではなく、主の恵みによってその人がいかに変わるかを見ておられます。主イエス様はシモンを深いまなざしでご覧になったように、今、私たちをも見つめておられます。私たちをご覧になり、呼んでおられます。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう」と呼びかけておられます。主に従う人とは、まさしく「人をすなどる者」としてイエス様に召された人のことを意味します。私たちはこの大切な事実を確信し、自覚しているでしょうか。

イエス様は全世界のすべての人のために、十字架上で完全な救いを備えられました。誰であっても、罪人としてイエス様のところに来てイエス様のなされた救いに感謝すれば、その人は救われます。

イエス様は、この「福音」を伝える人を探しておられます。「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう」（イザヤ　6・8）と主は今日も尋ねておられます。私たちの中の誰がイザヤのように「ここに、私がおります。私を遣わしてください」と答えるでしょうか。私たちの周りには、まだ救いを知らない人々がたくさんいます。しかし、どうすればイエス様のために魂を獲得できるのでしょうか。これは私たちが生きている限り、一瞬ごとに問うべき差し迫った問いだと言えます。なぜなら、悪魔はどうしたら人間を滅ぼすことができるか、どうすれば人の目を見えなくするこ

とができるかとそればかりを考えているからです。

ここで、人が救われるための必要条件とは何か、人々はいかにして主イエス様を知ることができるのか、人を救うために主なる神が何をなされたかをご一緒に聖書を通して見てみましょう。

人が救われるためには

神の御子・イエス様は人としてこの世に来てくださいました。イエス様は「罪人の友」です。人が救われるためにはこの方に会わなければなりません。神と人との間の「仲介者」であるイエス様に会うことがどうしても必要です。

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。

（1テモテ　2・5）

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

（使徒　4・12）

イエス様は復活されてから、私たちの助け主としてすべての人に聖霊を注がれました。この聖霊だけが人の魂を解放することができるのであり、聖霊はそれを望んでいます。聖霊の働きなしに、誰も自分の罪を認めることはできませんし、また悔い改めることも、信ずることもできません。救いは、神の側から一方的になされた事柄です。

すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。」

（ゼカリヤ　4・6）

では、罪人はどうすれば救われるのでしょうか。大切なのは、悔い改めることや、信じることではありません。また、主イエス様が自分の罪のために死なれた、という知識でもありません。大切なのは、正直な心をもって、まごころで主イエス様のところに「行く」ことです。

罪人の友、イエス様のところへ

イエス様が地上におられる間、敵はイエス様を「罪人の仲間だ」と言いました。これは何という真理でしょうか。実に、イエス様は「罪人の友」です。イエス様はこの地上で、はじめに人々の友として歩まれ、その後、人々の救い主になられたのです。今も同じように、イエス様は私たちの救い主になるため、私たちの友として近づいて来てくださるのです。私たちがイエス様を自分の救い主として受け入れる時が来るその前に、イエス様は罪人の友として私たちを迎え入れてくださいます。主が「罪人の友」であられる事実をいくつかご紹介しましょう。

ある若い女性が、主を信じる人に「私には救いは要らない」と話しました。その女性はミッションスクールを卒業していて聖書知識はありましたが、自分勝手な道を選ぼうと決心していたのです。信仰者が女性の話を聞いたあと「では、一緒に祈りましょう」と言うと、彼女は驚いて「祈ることなんて何もありません。いったい何を祈ったらいいの」と尋ねました。「それは、私の決めることではありません。はじめに私が祈りますから、そのあとであなたも祈ってください。私に話したことをすべて主に言えばいいのです」と信仰者は言いました。女性はそんなことはできないと言いましたが、「どうしてできないのですか。イエス・キリストは罪人の友であることを知らないのですか」と言われたとき、「罪人の友であ

るイエス・キリスト」という事実に心を動かされて、彼女は「罪人の友」に祈り、数日後に救われました。

聖書は、はっきりと告げています。罪人が救われるために、イエス様は「罪人の友」としてこの地上に来られました。この「罪人の友」であるお方は、世界が造られる以前、万物より先に父なる神のみそばで栄光をお持ちになっていた方なのです。一切のものはイエス・キリストによって造られ、イエス様のために造られたと書いてあります。何という素晴らしいお方でしょうか。使徒たちも証ししています。

ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。

（使徒　16・31）

もし誰かが、「私は信じることができない」と言ったらどうすればよいのでしょうか。

ある人がとても困った表情で「私はいくら努力しても信じることができないのです。信じたいけれどもできません。家族にいつも『信じなくては』と言われるけれど、どうしてもできないのです」と言いました。信仰者は、「それはかまいません。ただ、あなたは『イエス様、私は信じることができません から、信仰を与えてください』と祈ることはできるでしょう。イエス様は罪人の友として、喜んで応えてくださいますよ」と教えました。

聖書は悔い改めの大切さについてはっきり言っています。ところが、多くの人々は悔い改めたくないと思っているのです。その人々をどのように取り扱ったらよいか、次の人の例を見てみましょう。

ある大学生が、「私はまだ若いから、この世の喜びを味わいたいのです。今は救われたくありません。イエス様と一緒に十字架につけられた強盗は、この世の喜びを味わって生きたでしょう。そうして彼は救われたじゃありませんか。私は若い。もう四十年間は楽しく生活したい。そのあとで悔い改めますから」と話しました。聞いていた信仰者は「そうですか。では祈りましょう」と言ったのです。「祈れません」と学生は答えました。「いえ、あなたはできます。私に話したことを全部イエス様に言えばよいのです。イエス様は悔い改めたくない者の友ですよ」と言いました。学生は「いや、そんなことは言えないよ」と首を振っていましたが、最後には祈りました。「イエス様、私はまだ悔い改めたくないのです。あなたの救いは欲しくありません」と祈ったのです。すると、主はこの若者の心にお働きになってくださって、彼はその日のうちに救いに導かれ、救いの喜びを体験したのです。

次の例は、今から百年以上前のイギリスのある女性の話です。その人の両親はクリスチャンでした。彼女はイエス様の救いを自分のものにしたいと思っていました。けれども救われませんでした。そんなある日、彼女はあきらめの気持ちで、町の小さな教会へ行きました。そこの牧師が説教の途中で彼女に向かって「あなたもきょう、主イエス様の救いを自分のものとすることができます。自分で何もしなくてもよいのですよ」と言ったその瞬間に、彼女は救われたのです。女性は家に帰って次の歌を作りました。

1　ほふられたまいし、神の小羊よ。
　御声に従い、我行く、ただちに。

2　ありのまま行く身。などて言い訳せん。
　頼むは聖むる汝が血のあるのみ。

3　疑いは内に、闘いは絶えず。
　恐れはおおえど、我行く。ただちに。

4　こころよく迎え、

ことごとく聖き者となしたまわん。
我行く。ただちに。（聖歌 271）

神のみこころを記した聖書は、罪人にできないことが、罪人の友、イエス様にはおできになると強調しています。ですから待つ必要はありません。ただちに罪人の友、イエス様のところへ行けるのです。心の状態がどうであろうと、どんな問題を持っていようと、そのままで主イエス様のところへ行けるのです。そしてイエス様にありのままを話せばよいのです。

御子イエス様を信じるだけで

「救い」とはいったい何でしょうか。多くの人は、救われるためにはイエス様が自分のために死んでくださったことを信じることが一番大切だと思っています。しかし聖書には、「イエス様が自分の罪のために死んでくださったことを信じることによって救われる」とは書いてありません。「主イエスを信じなさい。そうすれば、…救われます」（使徒 16・31）、「御子を信じる者が、…永遠のいのちを持つ」（ヨハネ 3・16）と書いてあります。

これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。（ヨハネ 20・31）

ヨハネは次のように書いています。

この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。（ヨハネ 1・11）

その当時、イエス様を実際に見た人々は、なぜイエス様を受け入れなかったのでしょうか。主の救いが信じられなかったためでしょうか。そうではありません。イエス様はまだそのとき十字架につけられていませんでしたから、みな「救い」のことは知らなかったのです。彼らは「主イエス様ご自身」を受け入れなかったのです。

一番大切なのは、主イエス様の成し遂げられた救いの御業を信じるかどうかではなく、主イエス様は「神の御子」キリストであることを信じることです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ3・16）

ここには「御子が自分のために十字架の上で死ん



でくださったことを信じる者は永遠のいのちを持つ」とは書いてありません。「御子を信じる者が・・・永遠のいのちを持つ」と記されています。もちろん私は主イエス様の救いの御業を過小評価したいと思っているわけではありません。ただ、救われるために大切なのは知識ではない、ということを申し上げているのです。鍵は、イエス様に「会う」こと、イエス様のもとへ行くことです。

その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。（ヨハネ　17・3）

新約聖書から三つの例をとって見てみましょう。



強盗

はじめはイエス様の隣で十字架につけられていた強盗です。

十字架にかけられていた犯罪人のひとりはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。」と言った。ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」

イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」（ルカ　23・39〜43）

強盗は、死の直前にイエス様によって救われました。彼の受けた罰は当然の報いでした。それなのに、どうして彼は救われたのでしょうか。強盗が「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください」と懇願したとき、イエス様は何とお答えになったでしょうか。「あなたは実に悪い生活をしてきた。罪を犯した魂は死ななければならない。しかし、安心しなさい。わたしは今、あなたの罪のために死ぬのですから、あなたも救われる可能性があります」ではなかったのです。イエス様は「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」とおっしゃいました。どうしてイエス様はこういうふうに言われたのでしょうか。どうしてイエス様は救いのご計画について話されなかったのでしょうか。なぜなら、

この強盗が「イエス様は神の子である」と信じたからです。救われるにはそれで十分でした。

長血の女

次の人物は長血を患っていた女性です。

そこで、イエスは彼といっしょに出かけられたが、多くの群衆がイエスについて来て、イエスに押し迫った。

ところで、十二年の間長血をわずらっている女がいた。この女は多くの医者からひどいめに会わされて、自分の持ち物をみな使い果たしてしまったが、何のかいもなく、かえって悪くなる一方であった。彼女は、イエスのことを耳にして、群衆の中に紛れ込み、うしろから、イエスの着物にさわった。「お着物にさわることでもできれば、きっと直る。」と考えていたからである。すると、すぐに、血の源がかれて、ひどい痛みが直ったことを、からだに感じた。イエスも、すぐに、自分のうちから力が外に出て行ったことに気づいて、群衆の中を振り向いて、「だれがわたしの着物にさわったのですか。」と言われた。そこで弟子たちはイエスに言った。「群衆があなたに押し迫っているのをご覧になっていて、それでも『だれがわたしにさわったのか。』とおっしゃるのですか。」イエスは、それをした人を知ろうとして、見回しておられた。

女は恐れおののき、自分の身に起こった事を知り、イエスの前に出てひれ伏し、イエスに真実を余すところなく打ち明けた。そこで、イエスは彼女にこう言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい。」(マルコ　5・24〜34)

24節に「多くの群衆がイエスについて来て、イエスに押し迫った」とあります。多くの人々がイエス様の着物に触ったことでしょうが、癒されたのは一人だけでした。彼女が癒されたのは知識があったからではありません。イエス様ご自身に会って、意識して主に触ったのです。弱い病気の女が、力に満ちた「罪人の友」に触れたその途端に、癒されました。女性はイエス様に呼ばれ、驚きと喜びにあふれて「イエスの前に出てひれ伏し、イエスに真実を余すところなく打ち明けた」。そして、罪人の友は塵の中から女を引き上げ「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです」と言われました。

取税人

三人目の例は取税人です。

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。

「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

(ルカ　18・9〜14)

ここに出てくるパリサイ人と取税人の祈りの違い

は、はっきりしています。パリサイ人は律法の知識があり、いけにえや捧げものについてよく知っていました。けれども彼には生ける神ご自身を慕う気持ちはなかったのです。一方、取税人は「こんな罪人の私をあわれんでください」と祈りました。二人の違いは明らかです。一番大切なのは、正直な心をもってまごころで主イエス様のところに行くことです。

ペテロの宣教

聖書にある使徒ペテロの宣教で強調されていることは、神の救いのご計画についてではありませんでした。

イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと、不思議なわざと、あかしの奇蹟を行なわれました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身がご承知のことです。あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。（使徒　2・22〜24）

どうしてペテロは、流されたキリストの血潮について、あるいはまたイザヤ書53章を開いて、イエス・キリストの犠牲の死について説教しなかったのでしょうか。彼は、「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」（使徒　2・36）と、イエス様ご自身についてだけ話しています。ペテロは

救い主と言う名前さえも使いませんでした。それにもかかわらず、この説教の結果、三千人以上の人々が「救われるために何をすべきでしょうか」と叫んだのです。

ペテロは、後にコルネリオのところへ導かれて行ったときも、主イエス様の犠牲の意味、また贖いの血潮の価値については話しませんでした。聞いているのは異邦人たちでしたが、イエス・キリストご自身のことばかり話したのです。そのとき「耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった」（使徒　10・44）と書かれています。

今まで見てきたように、救いは「知識」の問題ではありません。救いを自分のものとするには、「主イエス様に触れなければならない」のです。私たちは救いのご計画や罪の結果などはわからなくてもよいのですが、主イエス様を見なければいけないのです。

私たちの主は生きておられます。イエス様は十字架につけられたままの救い主ではありません。イエス様は高く引き上げられた「主」として父なる神の右に坐しておられます。救われるためには、人は十字架にではなく、「恵みの御座におられる主」に近づくべきです。「御子を信じる者が永遠のいのちを得る」と書いてあるからです。

ふつう私たちは福音を宣べ伝えるとき、「悔い改めて、信じなさい」と言います。しかし、多くの人々はこのようなメッセージを聞いても救われません。例えば、私たちが罪の恐ろしさ、また罪の報いについて熱心に話しても、ある人々は「そんな話は何回も聞きました。全部わかっています。でも私は罪を犯すことがやめられない、罪が大好きなんです」と言うでしょう。このような人々を助けることがおできになるのは「罪人の友」だけです。

また他の人々は、私たちの話を聞いて救われたい

という願いを持つのですが、しばらくすると私たちのところへ来て「すみません。この間の話の三番目の点を忘れましたからどうかもう一回教えてください」と尋ねます。救われるのに、人は話の中身を忘れてもかまいません。救われるのは意志や理解力の問題ではなく、聖書の知識でもありません。主イエス様に会うことです。

正直な心で主のもとへ

「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。」（エレミヤ　17・9）と聖書にあります。私たちは良い心をもっているのではありません。しかし、偽りに満ちて悪に染まっている心の持ち主でも、正直になり、罪人の友であるイエス様に話すことはできます。前に紹介した婦人のように、み前にひれ伏して、すべてをありのままに申し上げることができれば幸いです。イエス様に向かって「神様、罪人の私をお赦しください」と正直に言えるなら恵みです。

主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。（2歴代　16・9）

主はいつも正直な心の持ち主を捜しておられます。救われるためには、信仰よりも、悔い改めよりも、正直な心が必要です。

強盗が、主よ、私を思ってくださいと願ったとき、正直な心をもっていました。長血の女が、せめて主の着物にでも触れたいと前に出たとき、そして取税人が、神様、罪人の私をお赦しくださいと祈ったとき、正直な心をもっていたのです。

サウロと呼ばれていたパウロは、イエス様の救いを求めていませんでした。それどころか、教会の人々を迫害していたのです。しかし主のご臨在に触れたとき、「主よ、私は何をしたらいいのでしょうか」と尋ねたのです。つまり彼も正直な心をもっていました。

主イエス様は「罪人の友」です。イエス様はどのような罪人でも、御許に来る人を拒まずに受け入れてくださいます。罪人の友に、自分の考えていることを残らず告げるなら、正直な叫びを主は聞いてくださいます。

イギリスのある婦人の身に起こったことをご紹介します。彼女は大富豪として有名で、立派な教育を受けた音楽家であり、また若くて非常に美しい人でした。それにもかかわらず、彼女の心は満足していませんでした。ある夜、彼女は「神様、私はすべてを持っています。富、若さ、健康、美しさ、名誉、あらゆる荘厳、あらゆる栄光、享楽のすべてをもっています。でも、あなたに降伏していません。神様、私はあなたの救いは欲しくないのです。私はあなたが大嫌いです。あなたが提供するという喜び、平安が大嫌いです。ですが、神様、私の欲しくないものを与えてください。私は幸福になりたいのです」と叫びました。その瞬間にこの婦人は救われました。そして、イエス様に用いられる人になったのです。

一番大切なことは、正直な心でイエス様のところへ行くことです。罪人の友イエス様は、喜びをもって罪人を赦し受け入れてくださいます。それはいつでしょうか。今です。「今は恵みの時、今は救いの日です」（2コリント　6・2）と、聖書は告げています。「御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つ」（ヨハネ　3・16）、「信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つ」（ヨハネ　3・15）、「わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです」（ヨハネ　6・40）、「主の名を呼ぶ者は、みな救われる」（使徒　2・21）と。

人が正直な心をもって罪人の友のところに行った

そのときから、御霊は信仰による悔い改めへと導いてくださいます。

純真に求める心

いままで私たちはいろいろな人々について考えてきました。悔い改めたくない人、救いが欲しくない人、あまりにも大きな罪を犯したためにもう希望がないと思っている人、救いを理解することのできない人、また、救いの計画はわかっていても主イエス様を拒む人などです。このような人々でも救いを自分のものとすることができます。もし彼らが正直な心をもって、すべてありのままを罪人の友に話すなら、主は受け入れてくださるのです。神などいないと思っている人でさえも、まごころで主にすべてを話すなら救われます。

最後に、幼子のごとく純真に求めることの大切さを見ましょう。

彼らはエリコに来た。イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めた。そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、彼はますます、「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てた。

すると、イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい。」と言われた。そこで、彼らはその盲人を呼び、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている。」と言った。

すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。そこでイエスは、さらにこう言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」すると、盲人は言った。「先生。目が見えるようになることです。」

するとイエスは、彼に言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。（マルコ 10・46〜52）

何が欲しいのかと聞かれ、「先生。目が見えるようになることです」と盲人は即座に答えました。一番必要とすること、最も渇望しているものをひたすらに求めることは大切です。

どうか、素直に「私は罪人です、罪を赦して下さい。私は恐ろしいのです。平和を与えてください。私は愛することのできない冷たい人間です。愛をください。私は本当のいのちを持っていません。私にいのちをください。私はなぜ生きなくてはならないか、それがわからないのです。教えてください。私は盲人なのです。どうか、わたしのこの目を開けてください…」と求めてください。永遠の愛をもって愛し、赦してくださり、永遠のいのちを与えてくださる方、神の救い主であるイエス様の前に信仰の手を差し出しましょう。イエス様はあなたが何も持たずに御許に来るのを、今も待っておられます。空っぽの手をイエス様の御許に差し出そうではありませんか。



神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ

（8回連載、第6回）

第六章　確信をもって
人生を生きていける聖書

はっきり言えることは、この世で一般に「宗教」と言われているものからは私たちの人生を確実なものにする基盤は得られない、ということです。この世に多く存在する「宗教」は、その中心である神や仏なるもの、または人間が作り出した偶像的な人や物などを崇拝し、善行、修行、精進、献金、奉仕などを強要するものです。また、その求道や修行は、どこまで行ってもこれでいいという終わりがありません。その教義は人間的な知恵や悟りに拠っているので相対的であいまいです。ですから、このような宗教の中に人生の不動の基盤、確信、平安を求めても、それらが得られることはありません。その多くは「何々をすれば何々が与えられる」という応報主義ですが、信者の努力に与えられる「報い」には何の確約もなく、何の確実性もありません。宗教を信じることによって得られる安心感も、単なる気休めに過ぎないことが多いのです。ですからこの世の多くの人々は「宗教」と聞くと、それだけで不確実なもの、怪しげなものと思って逃げ出してしまうのです。

しかし、聖書が説く「福音」は、それらとはまったく異なるものです。「福音」は、人間が考え出したものではなく、まことの神が私たちに提供しようとしておられるものです。ですから神の方から人間に「福音」を伝えようと、一人ひとりを探し求めておられます。これらのことを明らかにするために、この章のテーマは、「聖書から人生の確信が得られるか」としたいと思います。

人々は神について、確信を持てないでいる

現代人は、日常生活では明敏で実利的です。例えばちょっとでも痛いところがあると、すぐ医者に行って原因と療法を知ろうとします。「先生、ここが痛いのですが、何の病気でしょうか。どうすれば直りますか」と聞きます。

いま一つの例を出しましょう。お手伝いさんを募集しているという状況を想像してください。雇い主の女性は、応募してきた女性にこう説明します。「あなた用のテレビのある個室を用意しています。疲れた時は音楽を聴いて休憩していいです。休日は週に一度。それも完全にお休みになります」と。応募してきた女性は「素敵ですね。でも私が知りたいのは、お給料はいくらで、その支払いはどういう条件かということです」と言います。そこで雇い主はこう答えます。「わかりました。でもそれは、まずあなたがどのように働くかを見せてもらってから決めましょう」。応募者は言います。「それだと私はここで働くかどうかを決められません。まず、給料がいくらか、支払いの条件はどうかをはっきりと知りたいのです」

このやり取りは、基本のところで食い違っています。もちろん、仕事を捜す時に最も大事なことは、給料がいくらなのかということです。その金額を明確にしないのは不誠実です。私たちは金銭的な問題を後回しにしたまま仕事に就くことはできません。他のことについても、時間や労力を使うからには、その対価が明確でなければ取り掛かれません。それは当然です。ところが宗教では、いわゆる神や仏、偶像から何を得られるのか、という最も大切な点を明確にせず、驚くほど不確かなままで入信を勧められることが多いのではないでしょうか。これはまさ

しく宗教側の不誠実であり、怠慢です。

私は何年か前に、アウクスブルグで集会を開きました。教会の行事に使う広場にテントを張りました。主催者は土曜日の深夜開催というアイディアを思いつきました。しかし、そのことは直前まで公表されませんでした。大勢の人々が野次馬的な好奇心だけでやって来るのを防ぐためでした。私の仲間たちは深夜前に車で出かけ、閉店後のレストランやバーから人々を誘いました。帰ろうとしているお客やお店の人たちを車でテントまで連れてきたのです。人々が集まったところで私は壇上に上がり、集会を始めました。目の前には雑多な人々が集まっていました。お酒の飲み過ぎでふらついている人もいました。ちょうど私の前には、口にタバコをくわえた太った男性が座っていました。私はその時、この集会がうまく行くように神に祈りながら話し始めました。そして「神」という言葉を口にしたとたん、目の前の太った男性が大声で言いました。「神様なんて、おりゃせんよ」。会場は爆笑で包まれました。私は彼に向かって言いました。「神様がいない？そのことを、どうしてあなたは知っているのですか。神様はいないと百パーセント確信できますか？」。するとこの男性は頭をかいて、口の中でタバコを噛みながら言いました。「まあ、そのことは誰もはっきりとは知らないんじゃないの」。そこで私はその人に向かって言いました。「そんなことはない。現に、この私は明確に知っています」。そして、イエス様を通して神をはっきりと知っていることを説明したところ、会場全体が静まり返りました。

ここで、私はこれを読んでいるあなたにもお聞きしたいのです。「あなた自身は、神様に対する確信をお持ちですか」と。そしてあなたに、確信を持って言っていただきたいのです。「イエス様が十字架で私の身代わりとなって死んでくださったので、私

たちの罪は赦されました。私たちはもう神様に対して何の債務もありません。私はそのことを知っています。私たちの罪の代価はイエス様によって支払われました。すべては完了したのです」と。

このように確信を持って断言できるキリスト者は、実はそう多くないのではないでしょうか。それはとっても変だと思われませんか？キリスト者も、信仰を持っていない人も、神に対して何の確信も持てないままの状態で、平気で生きているのです。

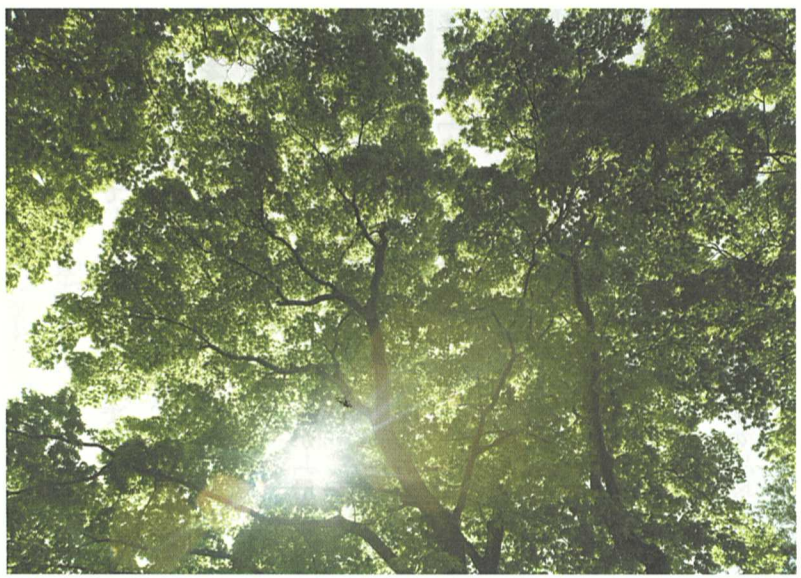
もしも私が町中で誰かを呼びとめて、「あなたは神が生きておられることを信じますか」と尋ねるとします。するとその人からは「そうですね。たしかに神は存在すると思います」という答えが返ってくるかもしれません。しかし続いて、「あなたは、その神のものとなっていますか」と尋ねれば、その人は「分かりません」としか答えられないでしょう。多くの人々は、この問題に対して非常にあいまいな態度のままで生きているのです。

若い友人の一人が、最近、次のような体験をしました。彼は学生で、休日は建設現場で働いていました。現場の人たちは彼が教会に行き、青年会に属し、福音を伝えるのに熱心な若者だと知って、からかいました。「毎週、教会に行っているなんて、お前、気でも狂ってるんじゃないか」と。彼が「僕は日曜日だけでなく、平日も学びの会に行っています」と言うと、「お前はほんとに狂っているぞ」と言われました。「キリスト教は二千年も続いたそうだが、牧師たちは人を馬鹿にしているだけさ。聖書なんてくだらんさ」。このように、この若者はよってたかって攻撃されました。しかし彼は負けずに言い返しました。「あなたがただって、どっかの教会に行っていたんでしょ？」。すると、からかっていた人々は急に静かになって、一番の年長者が次のように言いました。「教会に行ってたかって聞かれりゃ、その

通り。この俺だって神は信じているさ。お前はまるで自分だけがキリスト者だ、と言いたいみたいだけど、俺だって神のことは信じているさ」

他の連中も同じように言いました。「お前は自分の方が俺たちより偉いとでも思っているんじゃないのか。けど俺たちもクリスチャンだし、俺たちだって神を信じているんだぞ」と。そしてそこにいた皆が口々に言いました。「俺たちは神様を信じている。俺たちだってクリスチャンなんだ」と。彼らが言い終わった時、私の若い友人は次のように言いました。「それなら、どうして私をこんなふうにからかうのですか」と。すると彼らは言いました。「お前の言うことは、いちいち頭にくるのさ。だから、つい、からかってみたくなるのさ」

一見教会など縁がなさそうな荒くれ男たちは、皆で彼の信仰をからかい、攻撃してきました。けれどもいったん静まって真剣になると「俺たちだってクリスチャンだ」というふうに言うのです。彼らは、神に対する態度があいまいで、その信仰に何ら確実なものがないことが分かります。ある時は信仰があり、またある時はまるで信仰がないかのように振舞って平気なのです。読者の方々も、このようにあいまいな態度で生きているのではありませんか？



すばらしい確信を与えてくれる聖書

ある人々は私にこう言い、また尋ねます。

「あなたたちは本当に信仰の確信を持っているのですか？　『聖書について深く知らなくていい、ただ信じればいい』と耳にしますが、あなたはどう思いますか？　聖書は、私には分からないことが多いのです。ただ言われたことを信じるしかないのです」。このような言葉から、多くの人が「クリスチャンは信仰の確信をはっきりとつかめないままでいい。ただ信じていればいいのだ」と思っていることが分かります。

また、「キリスト教は一つにまとまっていない」ということもよく言われます。「カトリックにプロテスタント。ロシア正教。聖公会。プロテスタントの福音派の中にもルーテル派や改革派や他にもいろいろとありますね。一体どれが正しいのですか」と。

真のキリスト者の信仰がどのようなものかについては、新約聖書を通して知ることができます。そこには信仰によって得ることができるものは何か、何が確信できるようになるかがはっきりと書かれています。多くのクリスチャンが自分の信仰をあいまいなままに放置しているのはおかしなことですが、ちゃんと新約聖書を読めば、そのあいまいさはすぐ確信に変わります。そのことを短くお話ししましょう。

まず、新約聖書の中で語られている確信の第一は「神は生きておられる」ということです。人々は、神とは人間を超越した至高の存在であり、何か近寄り難い遠くの存在と考えがちです。しかしそうではありません。神は今も生きておられ、私たちに愛の目を注いでいてくださる、温かい身近な存在です。それがはっきり分かるのは、真の神がこの地上にひとり子のイエス様を遣わしてご自身を啓示されたからです。どこでもいいから聖書を開いてみてください。そこには抽象的な宗教問題ではなく、「神が生きておられる」という、いろいろな証しが語られています。神はイエス様を通してご自身を啓示なさいました。また神が私を、またあなたをいかに愛しておられるかという確信も、同様に聖書から得ることができます。それは想像ではなく、明確に聖書に書かれていることです。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

（ローマ　8・38～39）

神の愛はイエス様を通して私たちのところに伝わってきます。私たちはそれを頭の中で想像するのではなく、確実に実在するものとして知っています。神の愛はイエス様を通して私たちに注がれます。イエス様の弟子であれば必ず次のように証しするでしょう。「私は神の愛の力を祈り求めます。その愛はイエス様にあって啓示されるのです」と。

あなたはこの神の愛をご存知ですか。

聖書に出てくる人物は、皆、自分自身が神のものとされたことを、確信をもって知りました。詩篇49篇の中で、ダビデは次のように言っています。

しかし神は私のたましいをよみの手から買い戻される。神が私を受け入れてくださるからだ。

（詩篇　49・15）

ダビデは「私はいつか救われるだろう」とは言いませんでした。彼は確信を持って「神が私を受け入れてくださるからだ」と既定の事実として語っています。神を信じる者は神によって救われ、神の子どもとなっていることは既定の事実です。イエス様の弟子たちも、イエス様を通して自分たちの生きている意義が変化した、つまり罪と死からイエス様のいのちのうちに移された、ということをはっきりと知ることができたのです。あなたはそのことを確信できますか。

私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。

（ローマ　8・16）

パウロも、私たちが神の子どもであることは聖霊ご自身が証ししてくださっている、つまり神の確証を得ている事実だ、と語っています。このような確証、確認は聖書の至る所に見ることができます。なぜクリスチャンの一部の方々がこのような信仰の確信を持たずにいられるのか不思議です。私たちがイエス様を信じ従ったその時から、神の救いの内に加えられ、死からいのちに移されていることは、2×2が4であるのと同じくらい明白なことですから。

「信仰は分からなくてもいい、ただ信じるべきだ」と言う人々がいることも分からなくはありません。しかし、そのように思い込んでいる方々にお伝えしたいのは「神が生きておられる」ということ、そし

てもっと大事なことは、神はイエス様を通して私たちを愛してくださっているという事実です。今も生きておられる神のもとに立ち返った人々は、次のように言います。「イエス様が私たちをご自身のいのちに代えて救い出してくださったことを確信しています。また私たちは、私たちが神の子どもであるという事実をそれ以上に確信し、喜んでいます」と。

現代の教会のどこに、このような輝かしい確信を見いだすことができるのでしょうか。そのことを考えると、私たちは自分が聖書から離れてしまっており、今すぐ聖書に立ち返らなければならないということに気がつくのです。「ほんのわずかの信仰」で十分だ、ということはあり得ないのです。聖書に基づく信仰をしっかりと持つことにこそ真の価値があります。聖書から得られる確信、つまり神が私たちを愛し、私たちが神のものとなり得るということ、それこそが「真に価値のあること」です。このほかの一切のものは、何の価値もありません。そして、聖書に基づく信仰の確信、それに基づく感謝と賛美こそが、神の栄光を輝かせるのです。そしてこのことを体験的に知っている人々は、必ず次のように言うでしょう。「私は聖書に書かれてあることを確信しています。そして唯一の神だけが私の誇りです。また、私は確信しています。まことの神だけが最も高く、最も良き方だということを。また神が私の友であり、また父でもあられるということを」と。

私は福音を伝える時に、「神が聖書によって明らかにされたことのすべてを堅く信じる」ことがいかに大切であるかをしっかりと伝えています。キリスト者として人生を歩む以上、あいまいな信仰の霧の中をさ迷うことがあってはならないのです。真の信仰は、堅固な確信の上に立ち、神の栄光を輝かせるものであるべきです。その確信とは、イエス・キリストとその血を土台としています。私たちは、自分

が信じているものを「よく知っています」と言えるようでなければなりません。

このことをもう一度、別の角度から見てみましょう。信仰におけるキリスト者の確信とは次のように言うことができます。「神は生きておられ、イエス様を通してみこころを啓示される。イエス様は唯一の真理である。イエス様は人々を罪から救い出し、神との和解を得させるために死んで、よみがえられた。私は、これらの事実を体験として自分のものにしている」

言いかえると、キリスト者の確信とは、「神が生きておられ、イエス様を通してご自身を啓示され、人々の罪を贖うためにひとり子のイエス様をこの地上に遣わし、十字架にかかっていのちを捨て、人類の罪を赦し、しかも三日の後によみがえられた」ということを、自分のこととして「知っている」ことです。私も信仰に導き入れられた時、神からこの確信をいただくことができました。この確信とは、たとえ一万人の無神論の教授たちが「イエスがよみがえったはずはない」と力説しても、「敬愛する先生方。私は私の救い主が生きておられる、ということを知っているのです」と、胸を張って言える力が神によって与えられているということです。たとえ一万人の科学者が聖書に書かれていることに反論しても「私は、それ以上に確信を持っています」と言えることです。たとえ全世界の人々が聖書に書かれていることを否定しようとも、「私は、私の信じている方を知っています」と言えることです。そして全世界があきれ果て、失望し、嘲笑した後にも、私たちは依然として次のように言うでしょう。「なぜなら、私は確固たる確信を持っています」と。このように聖書の中から得られる信仰の確信は確実で不動なものなのです。



あなたは信仰の確信をお持ちですか

ここであなたご自身にお尋ねします。あなたはすでにこのような信仰の確信をお持ちですか？それともまだ持ってはおられないでしょうか。もしあなたが次のように思われるなら、今まで私が語ってきたことは決して無駄ではなかったでしょう。「私は自分がキリスト者だと思ってきましたが、そうではありませんでした。私の場合、まだいろいろなことがあいまいなままになっています」

オランダで開かれた集会でのことです。真夜中の二時頃、ドアをノックする音がしたので起きて開けると、集会に集っている若者が大勢いました。私が「どうしたの？」と尋ねると、一人がこう答えました。「私たちは自分がキリスト者だと思っていました。しかし今、まだキリスト者になりきれていないことに気づいたのです」と。そして彼らはそのことで不安になり、夜中の二時ではありましたが、それをはっきりさせたかったのです。私たちの信仰が聖書の示す信仰の確信から遠く離れていると気づくことは、大変価値のあることです。

偉大なイギリスの伝道師スポルジョンはかつて次のように言いました。「信仰は霊的な感覚でつかめるものです」と。私たちにはこの世界を認識するために、五つの感覚が与えられています。視覚・聴覚・触角・味覚・嗅覚という五感です。それらによって私たちは三次元から成るこの世界を認識することができます。しかしこの五つの感覚だけしか持ち合わせていない人間は、神の存在を感知することができません。そして次のように質問します。「神様はどこにおられるのですか。私は神様を見ることができません。イエス・キリストも見えません。ですから何も信じられないのです」と。神を信じることによっ

て聖霊が私たちに光を当ててくださると、霊的な感覚をいただくことができます。見ること、聞くこと、触ること、味わうこと、匂うことだけでなく、まったく別の世界を認識できるようになります。聖書は次のように言っています。

その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。（ヨハネ　17・3）

最近、有名な大会社の社長さんを訪ねました。彼の会社は町の半分ほどが見渡せる高層ビルの一角にあり、私たちは広大なオフィスの社長室で話しました。必要な用件が終った後で、私たちはざっくばらんな話をしました。その時、彼は「牧師さんとお話しできるとは興味深いですね」と、次のような話を始めました。「私は、終戦後に聖書についての講演会に行ってみたことがあります。こう言っては何ですが、聖書の話というのは、ずいぶんとあいまいな点が多いように思えました。その講演会のテーマは、キリスト者と経済、キリスト者と軍備拡張、またキリスト者と軍備撤廃、キリスト者と教会というようなものでした。しかし実際のところ、キリスト者とはどういうものかが、講演会では分かりませんでした。おそらく、主催者自身がはっきりと分かっていないのだ、と見受けられました」と。

この非難は放っておけません。で、私は言いました。「あなたは誤解しておられるのかもしれませんね」。すると彼は「キリスト者って一体どういうものなのか、はっきりと説明できますか」と言うのです。そこで私は、「はい。もちろんはっきりとお答えできます。あいまいなことは何もありません」と言いました。ところが彼は、皮肉っぽく付け加えました。「キリスト者って、警察と対立しない人のことだ、とか、教会で洗礼も葬儀もする人のことだ、なんて言われていますが？」。私はそこで続けました。「社長さん、いい機会だから、キリスト者とはどういう人のことを言うのか聞いてください。キリスト者とは心の底から次のように言うことのできる人々のことです。『私はイエス・キリストが私の主であることを堅く信じます。主イエス・キリストは永遠の父なる神のひとり子であり、同時に処女マリヤからこの世に人としてお生まれになったお方です。この方は、私の救い主としてご自身のいのちを捨てて、この世に迷い破滅に向かっていた私のような者をも贖ってくださいました』と。社長さん、あなたも今のままでは『失われた人間の一人』なのですよ」。私がこのように言うと、彼はうなずきました。私はさらに続けました。「イエス・キリストは、失われ、破滅に向かっていた私たち人間を救い出して、すべての罪と悪魔の支配から解放してくださり、また死にも勝利してくださったのです。社長さん、私たちのいのちを悪魔の支配から買い取って、勝利されたのですよ。聖書にはこうあります。『ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。（1ペテロ　1・18〜19）』」と。

私は話し続けました。「何の罪もないイエス様の尊い血によって、私たちは罪から贖い出され、彼のものとされたのです。ですから真のキリスト者はこう言います。『私はイエス様のものです。イエス様は血潮によって、私を罪と死から、そして地獄から買い戻してくださいました。そのことを私は知っています。』」と。しばらくの間、沈黙が続きました。やがて彼は私に尋ねました。「私は一体どうすればそこにたどりつけるのでしょうか」と。私は答えました。「先ほど秘書の方からお聞きしましたが、こ

れから休暇に入られるそうですね。私は帰ったらすぐお宅に新約聖書を送らせていただきます。どうか休暇の間、ヨハネの福音書から読み始め、毎日少しずつでも続けてください。そしてその後にお祈りをしてみてください。そうすれば、さっき私がお伝えしたことがよく分かります。キリスト者の信仰は新約聖書によって確実なものとして伝えられています。書かれてあることは客観的な真実であり、イエス様を信じることにより、私たちは体験的にそれらのことを確信するようになります。それが『救われる』ということなのです。そのような確信を、ぜひあなたもお持ちください」と申しあげました。

私たちが神に受け入れられたこと、つまり神の子どもとされたことを確信しなければ、私たち人間は真に生きて行くことができないと思います。

ある若者に「君はイエス様を愛していますか。イエス様が君を受け入れておられる事実がはっきりと分かりますか。君がイエス様のものとされたという確信がありますか」と尋ねたことがあります。すると、その若者はこう答えました。「はっきりとは分かりません。自分の中にまだ戦いがあります」と。イエス様によって自分が受け入れられたことをはっきりと知らなければ、どうして私たちは生き続けていけるでしょうか。「神は生きておられる」と確信をもって言うことのできないキリスト者や、この世のお金のことはきっちりとしていても神のことはあいまいにしている人は、自分がキリスト者であるとは言えないと思います。新約聖書によれば、キリスト者とは、「私は、イエス・キリストが私の主となられたことを信じます」と断言できる人のことを言います。多くの場合、自分がキリスト者であると言っていながら、実はそうでないことがよくあります。何とみじめで危険なことでしょう。その人は、実はまだ真に救われていないのです。

どうすれば確信を持って生きて行けるようになるのか

結局、すべての問題は確信を持って人生を生きて行けるかどうかにかかっています。この「確信」こそ人生における最優先の課題です。この問題に明快な答えを得るためには、あなた自身がまず神に祈り、率直に尋ねてみる必要があります。そして規則正しく聖書を読み始めてください。主の前に毎日十五分間の静まる時を持ってください。

ここで一つ大切なことをお話します。信仰の確信は「理性を通して」得られるものではなく、「良心を通して」得られるものだということです。

聖書と神について多くの人々と話す時、信仰を持てない言い訳にしばしば直面します。例を挙げましょう。ある人は言います。「聖書を信じることは私にはむずかしい。だって、聖書には、おかしな矛盾があるでしょう？確か聖書にはこんなところがありましたね。人類の始祖アダムとエバはカインとアベルという二人の息子を作った。しかしカインはアベルを殺し、その後、地上をさまよい、妻を得た。しかし、その妻になる女性は一体どこから来たのですか？その頃地上には彼らしかいなかったのだから、一体どこから妻を見つけることができたのでしょうか？こういうところが私が聖書を信じる上での妨げになっているんです」。頭のいい人々は、よくこのようなことを言って、聖書のあげ足取りをします。自分の不信仰の言い訳にするのです。私は次のように言いました。「なるほど。ところで、あなたは聖書を読んだのですね。今も当然お持ちでしょう。聖書にはどのように書いてあるか、もう一度読んでみてください。聖書のあら探しをして、じっくり研究するのも、決して悪いことではありません。なぜなら、それによって聖書をよく読み、結果として信仰に導か

れる人々も多いからです。カインの妻の問題は、聖書では次のように書いてあります。要約すると『カインは地上をさまよい、そして妻を知った』と。もともと妻は連れて行ったのです。その妻とは一体誰だったのでしょう。アダムとエバにはたくさんの息子と娘がいました。聖書には、神が一つの家庭を人類の起源として定められたことが記録されています。ですから、カインの妻はその一人だったのです。人類が地に満ちた後で、神はこのような結婚を禁じられたのです」と。

しかし、このように聖書の記述を正しく説明し、疑問を解決してあげたとしても、果たしてその人はそれによって信仰を持つことができるでしょうか。また別の、あげ足取りの質問を用意して、次々と議論になるに違いありません。たとえ何千という質問に答えたとしても、依然として彼は暗闇の中に留まり続けるのです。信仰は、理性を通して、それも初



めから否定的な心を通して得られるものではありません。それはむしろ人間の良心の問題なのですから。

私の前任者ユリウス・ダーマンという人のところに、ある時、若い青年が訪ねて来て、同じような質問をしたそうです。その時、彼は次のように言いました。「イエス様は、そんな重箱の隅をつつくような質問に答えるために、この世に来られたのではありません。イエス様は罪人を救うために来られたのです。あなたが、自分はみじめな罪人であるという意識が持てた時に、もう一度訪ねていらっしゃい」と。良心の呵責にさいなまれ、自分の人生は何かが間違っているが、それを自分ではどうすることもできない、という意識を持つ人々が、素直に救い主を信じるようになれるのです。その場合、聖書を理性で理解することは後についてきます。

ある時、私は病院へお見舞いに行きました。その部屋には六人の男性がいましたが、私が部屋に入ると、彼らはうれしそうに私に挨拶をしてくれました。やがてその中の一人が「質問があるのですが」と切り出した時、私は何かワナが仕かけられているぞと直感しました。別の一人が私にこう尋ねました。「あなたは神が全知全能だと信じていますよね。それなら、あなたの神は自分で持ち上げることのできないほど大きな石を造ることができますか。それが不可能なら、全知全能だとは言えなくなりますよね」と。私は静かに答えました。「そんな質問に答える必要などないでしょう。あなたはそんなことで眠れないほど悩んでいるわけでもないでしょう。それよりも、あなた自身のことで夜も眠れない、という問題があるのではないですか?それはどのようなことですか?」。すると彼は少しためらった後に答えました。「私はある女性のことで悩んでいます。現在、彼女は妊娠中ですが、私たちは実はまだ結婚していないのです」と。私は答えました。「それはたしかに問題ですね。

では、それについてお話しましょう」。彼は非常に驚いて言いました。「えっ、この問題は信仰とはまったく関係ないのではないですか」と。そこで私は次のように説明しました。「先ほどの大きな石の問題は、信仰とはまったく関係ありません。しかし、あなたの女性問題は信仰と関係があります。あなたは罪を犯したのです。神の律法を守らなかったために、あなたはその女性を誘惑したことになります。よく考えてみてください。今あなたは大きな罪の中にいるのです。神があなたの罪を赦してくださるためには、あなた自身が生ける神に立ち返り、悔い改めることが必要です。神に対して、次のように言ってください。『私は罪を犯しました』と。そうすれば、あなたを助けることのできる救い主が、あなたのすぐそばにおられることが分かります」。その若い青年は、私の話にじっと聞き入っていましたが、突然、気がついたのです。「イエス様は、私の悩み、良心の呵責（かしゃく）を心配していてくださる方だ。イエス様は私を助けることのできる方だ。イエス様はこんな罪にまみれた私の人生を助けることのできる方だ」と。この青年は理性で信仰にたどり着こうと思っていました。けれども、自分の良心の呵責に触れた時に救われたのです。

救いの確信を得させるために、へ理屈をこねるだけの質問に答える必要はありません。良心の声に従って、ただ一度、自分が罪を犯したことをはっきりと認めさせることが必要です。そうすれば、十字架にかかってくださった救い主のことが分かるようになります。自分の罪が赦されている、ということを体験的に知ることができます。そしてイエス様が自分を受け入れてくださった、ということが分かるようになります。信仰の確信にたどり着くのは、理性によってではなく、良心を通してです。また、救いの確信を得るためには、冒険をする必要があります。

教会によくあるステンドグラスは外から見れば黒にしか見えません。けれども教会の中に入って見ると、光を通して色々なものが輝いて見えます。キリスト者の信仰もこれと同じです。外から見ている限り、何もつかむことができません。今のあなたの周りは真っ暗に思われるかもしれません。しかし危険を冒して中に入り、イエス様と共にやってみましょう。救い主に自分自身を明け渡して委ねましょう。そうすれば全てのことが明らかになってきます。どうかあなたも死からいのちへと一歩踏み出してください。そうすればキリスト者としての信仰が一体どういうものか、一気に見えてきます。

主イエス様は何千人もの人々の前で、次のように言われました。

人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ　3・3）



イエス様は、いつも多くの人々に神の国を伝えられました。しかし、それを聞いた人々の中には、その場から立ち去った人々もいたことでしょう。わずかな人々しか残らなかったこともあったでしょう。そんな時、イエス様は周囲のお弟子たちにこう言われたのではないかと思います。「あなたがたも、行きたければ行ってよい」と。

神の御国に入るには何の強制もありません。神の御国は自由意志に任され、求める人々にだけ開かれています。イエス様はきっと、「あなたがたも行ってよい。失われた存在になってよければ行きなさい。神なしに地獄に向かって走って行ってもよい。好きなようにしなさい。でも、それで本当にいいのですか」とおっしゃりたかったでしょう。深い悲しみと愛をもって。ですから、このように言われた時に弟子のペテロは考えたに違いありません。「好きなところに行けばよいと言われても、一体どこに行けばいいのだろう。昔みたいに辛い仕事と労苦しかない人生、罪にまみれた人生に戻るのか。いや、それだけはごめんだ。その道は死と地獄につながっているだけだ」と。そして再びイエス様を見上げた時、一つのことが確実に分かりました。それは、ただイエス様と共に歩む人生にしか価値はない、ということです。

そして彼は次のような確信に達しました。「主イエス様、私たちはどこにも行くところなどありません。なぜなら、あなたご自身が永遠のいのちのことばを持っておられるからです。私たちは、あなたが生ける神の御子であられることを認め、これからも信じて生きて行きたいのです。私はあなたのおそばにいます」と。このことは、その後の彼の行動が証ししています。

人はこのようにして信仰の確信にたどり着きます。人は自分の人生をふり返った時、イエス様だけがやり直す機会を与えてくださる唯一の神であることに気がつきます。これを読まれているあなたも、確信

を持って次のように言えるようになることを、私は心から願っています。「あなたは生ける神の御子キリストです、と私たちは信じています」と。

最後に、信仰を持ったばかりの方にお伝えしておきたいことが一つだけあります。「私は心を主イエス様に明け渡したのに、信仰の確信が持てません。一体どうすれば確信が得られるのでしょうか。私の人生には、まだたくさんの罪が残っています」。このように真剣に自分を見つめておられる方には、次のように言いたいと思います。「あなたは自分の罪がすべてなくなって初めて、救いの確信が得られる、と考えておられるのではないでしょうか。そうではありません。イエス様の十字架のみわざによる罪の赦しは、すでに二千年前、一度きりで完了しているのです。私たちは救われた後も、昔の性質を宿しているので、時に過ちを犯します。でも、赦されているという事実は揺るがないのです。つまり、私たちが罪を犯して悔い改める時、イエス様はその罪をもはやないものとしてくださるのです。これがイエス様による救いの真実です。このことを深く体験することができれば、きっとあなたは今以上にイエス様を知ることの確信に到達することでしょう」と。

放蕩息子の話をご存知でしょうか。放蕩息子は家に戻って告白しました。

> おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。（ルカ　15・21）

父親は彼を受け入れて、喜びの祝宴を催しました。ここでちょっと、聖書には書かれていないことを想像してみましょう。祝宴の最中、この息子は過って高価なワイングラスを床に落としてしまったと思ってください。長いこと豚の世話をしていたせいで、グラスの扱い方さえ忘れていたのです。それを見た

父親は「お前はひどい奴だ。何てことをしてくれたのだ。許すわけにはいかない。豚の世話に戻れ」と言うでしょうか。いいえ、そんなことは決してあり得ないのです。父親にとって一度受け入れた者は、生涯受け入れた者です。注意はするでしょうが、決して息子を追い返したりはしません。人は、いったんイエス様のものとされた後、生まれつきの悪い性質が残っていることに気づくことがあります。主に立ち返った後、敗北を経験して絶望に陥るのでなく、ひざまずいて次のように祈ってください。第一に「このような私ですが、まだ、あなたのものであるということに感謝します」。第二に「どうかあなたの血潮によって、私を赦してください」、そして第三に、「私の古い性質から解放してください」と。一番大切なのは、「こんな私でも主のものだ」ということを感謝することです。

救いの確信を持つ人は、次のことをよく知っています。それは、「自分は父なる神の家に戻り、今は聖（きよ）められるための戦いをしているのであって、もはや、家にいることを許されたり、追い出されたりすることを繰り返す、不安定な者ではない」ということです。

日々罪を犯すたびに、一から新しく神の救いを求め、新しく救いをつかみなおす、ということだとしたら、それは何とみじめなことでしょうか。例えば私の子供たちが毎朝私のところにきて「パパ、今日もあなたの子供でいていいですか？」などと聞く必要など全くないでしょう？彼らは私の子供に違いないのです。それと同じように、一度神の子どもとされた者は、神の子どもなのです。そして聖められるための戦いも、神の子どもとして行うのです。

ですから私は、あなたが「神の子どもとしての輝かしい確信」をしっかりと持たれることを心から願っています。



イエス様の平安をいただいて

岩下 淳一



左から淳一さん、妹の真奈さん、母裕子さん、父肇さん

私が幼少の頃に、両親はイエス様を信じて救われました。集会に行くようになってから両親が日々の生活の中で嬉しそうにしていることや、父が感情的に怒ることがなくなったことを子どもながらに感じていました。

私も吉祥寺集会の日曜学校に毎週、連れて行かれていました。そこでどんな話しを聞いたのかはあまり記憶にありませんが、みことばや賛美に触れ、神様はイエス様だと漠然と信じていました。しかし、中学、高校へ行くようになると、部活や友人との時間が楽しく、部活を言いわけにして集会へはほとんど行かなくなりました。その頃は、イエス様の必要を実感していませんでしたので、集会には極力関わりたくありませんでした。ただ、心の中にはいつも何かしらの不安がありました。小さい頃から人付き合いは苦手だと感じており、友人からどう見られているのか、といったことを意識していました。そのような考えや態度でしたから本当に親しい友人はできませんでした。

高校生活も残りわずかとなった頃、友人と楽しく話していても急に笑えなくなり、無理に笑おうとすると吐き気を感じることが、たびたび起きるようになりました。このとき、自分だけが違う空間にいるような感覚でした。このことをきっかけに、なぜ自分は「友人と同じにできないのか」と悩み、再び集会へ通いはじめました。

集会での、礼拝や福音集会のメッセージは心温まるものであり、与えられる喜びや平安はそれまで感じたことのない、心が満たされるものでした。イエス様を信じ従っていきたいという思いから、大学二年の夏に、御代田で洗礼を受けました。洗礼式では、兄弟姉妹が自分のことのように喜んでくださったことを覚えています。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。（ヨハネ　14・27）

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。（ヨハネ　15・11）

その後、小学生のときにある店の物を盗んだことが、心のうちに悩みとして持ち上がってきました。私は小学生のときに盗みをして見つかり、その時は両親が店に謝りに行きましたが、それ以前にも別の店で盗んだことがあったのです。恐れからこのことは言えずにいましたが、苦しみが大きくなり、耐えられなくなりました。この苦しみから解放されたい、イエス様の光の中を歩みたいという思いから、イエス様に祈り、お詫びのお金を持って店に謝りに行きました。店の人は許してくださり、「今日は幸せな気持ちになった」とさえ言ってくださいました。その帰り道は、喜びと感謝の気持ちでいっぱいになり、涙が止まりませんでした。私が犯した罪も、またそのことを隠していたことも、御霊が明らかにしてくださり、私の進むべき道を示してくださっているという大きな力と愛を感じました。

主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。（1テサロニケ　5・10）

平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだが完全に守られますように。（1テサロニケ　5・23）

キリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。（ローマ　8・10）

約四年前のことになりますが、父に胃癌が見つかり、三年間の闘病生活が始まりました。当初、私は、癌は治療の難しい病気だという程度のことしか知らなかったうえ、父の様子は見た目には変わりがなかったため、心から父を心配することはありませんでした。

胃の摘出手術は無事に終わりましたが、体中に張り巡らされているリンパ節に深く転移していることがわかりました。このことを父に伝えるのは不安な気持ちもありましたが、母、妹とともに「父の思いをも守ってください」と祈り、父に転移のことを伝えました。父は大きなショックを受けた様子もなく、静かに受けとめているようでした。

抗癌剤治療が始まり、父は痩（や）せていくとともに体調は最悪な状態になりました。私は父を見て、この病気は何のためなのか、この苦しみから得られるものがあるのか、と思うようになりました。治療で癌を抑制することはでき、一時期父の体調は少しずつ改善しているようでしたが、父は再発への不安から不満を口に出すことが多くなりました。私は、心の中で父に対して苛立つことが多くなり、そのことは言葉のはしばしや態度に出ていたと思います。

その後、癌は再発しました。父は痛みや苦しみでふさぎこみ、祈ることもなくなりました。暗闇の淵にいる父を見て、家族全体が、どうしたらいいのかわからない状態でした。ここまで父が苦しんでいる

姿を見て初めて、私は、それまで父の苦しさを本当に考えようとしていなかったこと、また病気になる前も後も私の言葉や態度が父を苦しめていたことを思い知らされ、悔い改めました。父親さえ愛することができず、父親のために心から祈ることのできない自分をみじめに感じました。

そんな中、正月に家族で御代田バイブルキャンプに行くことができました。御代田に着いた日、数人の集会の兄弟方が来て話し、祈ってくださいました。

そのとき父の心は喜びへと変えられました。私は、大きな苦しみに包まれていた父が心から喜んでいるのを見て、イエス様の愛は、この世の教えや理論では満たすことのできない、また人の努力ではどうにもならないことを解決してくださると思いました。

太陽がもうあなたの昼の光とはならず、月の輝きもあなたを照らさず、主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの光栄となる。あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はかげることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。…時が来れば、わたし、主が、すみやかにそれをする。（イザヤ 60・19〜20、22）

その数日後、父はもう半年もたないかもしれないと母から伝えられました。父はこのことを告げられても、平安のままでした。

それまで私は、自分には父と同じような弱いところ、うまくいかないところがあると思っていました。しかし、それを認めたくないため、父の弱さを軽蔑していました。けれども、弱くなることでイエス様に叫び求め、苦しみも自分の汚い思いもすべてをゆだねることができるなら、そのようにして主からの幸せと喜びが与えられるなら、むしろ父のようになりたいと心から思いました。

それから間もなく、私が仕事から帰ったとき、妹から、もう一カ月もたないかもしれないと言われました。そのとき、目を開けるのもやっとの父を見て、父との思い出が頭を駆け巡り、涙が止まりませんでした。父がとても愛おしく感じられ、自分ができることは何でもしてあげたいと思いました。心から人を愛するということを、初めて知ることができたような気がします。

その次の日、父は傍にいる妹と私に、「この世で、何が一番か、何が二番かなどはどうでもいいことだよ。ただ大切なのはイエス様だけだから」と話してくれました。この言葉が今も、鮮明に頭の中に残っています。

次の日は、兄弟姉妹方が家に来てくださり、共に礼拝を捧げる予定でした。またドイツにいる姉も到着する予定でしたので、母と妹とともに「イエス様。どうかもう一日お父さんを連れていかないでください。ただイエス様のみこころの通りにしてください」と祈りました。

その次の日の朝、集会の兄弟姉妹方が来てくださり、礼拝が行われました。父は意識がはっきりとしており、父も集われた方々も皆が喜びに包まれました。確かにその中心にイエス様がおられることを感じました。父は兄弟姉妹の一人ひとりとはっきりと話すこともできましたし、姉もその日に帰ってくることができ、父と話すことができました。そして、その日の夜、父はしゃべらなくなり、次の日の早朝、天に召されていきました。

私はこのとき、イエス様はいつも私たちを見ておられ、祈りを聞かれる方だとはっきりと知りました。それまで私は、洗礼を受けた後も、イエス様が祈りを聞いてくださるという確信、天の御国への確信が

ありませんでした。父の病気を通して私は、この確信をイエス様からいただきました。イエス様が望まれることを祈ったとき、それを与えてくださり、またイエス様の望まれることは私たちの思いを超えて実現するということの経験が、生きた宝として今も心の中にあります。

現在、エンジニアとして働いていますが、なお自分の中にある不安と自分さえよければ問題ないという思いがあることを、仕事を通しても示されています。また集会や生活においても、この性質は変わりません。毎日どんなことでも、主に祈ります。主は、主に依り頼む者には、私たちの考えをはるかに超えた方法で答えてくださると信じることができ、いつも静かな喜びに満たされます。

イエス様は、誰よりもさげすまれ、苦しみを受けられ、十字架についてくださいました。イエス様は、私たちの弱さを知っているからこそ私たちの叫びを聞いてくださいます。イエス様が来られるときまで、周りの方々にイエス様を証しし、お伝えしていきたいと思います。

あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに活かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかにお示しになるためでした。あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。

（エペソ　2・4～9）

岩下淳一
一九八四年　東京都練馬区生まれ
東京電機大学卒、横河電機株式会社勤務
妻　由希子



すべてのものをいただいています

岩下 由希子



前列左から2人目、由希子さん

私は、父・長岡健次、母・伊津子の長女として一九八五年に生まれました。高校を卒業するまで長野県の松代で育ちました。私は、小さいころから甘ったれで、ずる賢い子でした。あるとき、叱られて兄と二人家を出されたことがありました。小学校低学年だったと思います。夜も更けて真っ暗でした。兄は庭に一人でいましたが、私は裸足のまま泣きながら友達の家まで行き、一晩泊めていただきました。今考えると、兄を置いて一人で友達の家に行くなんて、なんて薄情で計算高い、と思いますが、今も変わっていない私の本質を現わしていると思います。庭に残った兄は、雨が降ってきたため家の横の物置で一晩過ごしたそうです。きっと親同士が連絡しあったのでしょう、朝になって兄が友達の家まで迎えに来てくれて一緒に帰った、そんな記憶があります。そのようによく叱られていましたが、父は叱ったあと、自分の部屋に私を呼び一緒にイエス様にごめんなさいの祈りをしてくれました。自分はどのように祈っていたのかは覚えてはいませんが、幼いころにしたイエス様への祈る体験は、思い出すたびにうれしいような、温かい気持ちになります。

私がイエス様と個人的に出会ったのは高校三年になる春でした。若者がたくさん集っていたバンクーバーキャンプの交わり会を通して、イエス様は心の扉を開いてくださいました。いわゆるクリスチャンホームで育った私は、イエス様を知識で知ってはいましたが、神様であるという確信を持ちませんでした。そんな状態でしたが、集っていた若者の集会に対する思いや両親への感情を聞くうちに、私のなかで様々な感情が湧きおこり、心の奥底からイエス様への愛、両親への愛、集会・兄弟姉妹への愛があふれ出る体験をしました。

その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。

（ヨハネ　16・13〜14）

それまで私は救われるときには何か大きな試練が与えられ、劇的に来るものだと思っていました。しかし、イエス様は私にちょうど良いときに静かな愛をもって示してくださいました。その夜、初めて自分から聖書を開き、同じ体験をした姉妹と共に祈りました。主が用意してくださっていた恵みのなかにいたと思います。

私はイエス様が神様である確信はいただきましたが、自分自身の罪についてはまだはっきりと示されていませんでした。高校を卒業した私は、大学進学のため親元を離れて石川県金沢市で四年間過ごしました。それまでほとんど勉強せずにいましたので、大学生活はとても苦労しました。勉強についていくのが精一杯で、いつしか日曜日に礼拝へ集うことを億劫（おっくう）と感じるようになりました。その頃は石川の小松集会と富山集会に隔週で通っており、どちらとも片道約二時間かかりました。テスト前には、行きたくないですと泣きながら祈っていたことを思い出します。

また同じころ、私は兄弟姉妹からどう思われているのかを常に意識するようになりました。嫌われたくない、どうか嫌わないで、と必死に笑顔を作っていたように思います。いつしか私は、もう疲れてしまった、集会を出たい、自分の道を歩みたい、と思うようになりました。両親に、自分は自分の道を歩みたいと電話で告げました。それを聞いた両親は、

その週末に長野から石川にいる私のもとに来てこう言いました。「ゆきこ、お前が自分の道を行きたいならそうしなさい。ただし今すぐ学校を辞めて自分一人で生きて行きなさい」。妥協する父ではありません。また私は、必死に上がってきた学校を辞めたくはありませんでしたし、ひとりで生きていく自信もありませんでした。イエス様はいつも私の前に道を二つ置かれます。自分の道か、イエス様の道か。のろいの道か、祝福の道か。そしていつも、イエス様の道をとれるようにと、このようにして導いてくださいます。結局、私は泣きながら自分の思いを捨てました。

私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、あなたの神、主を愛し、御声に聞き従い、主にすがるためだ。

（申命記　30・19〜20）

両親から離れた四年間、私は自分の思いのまま歩みました。今思い返しますと、確かに楽しく有意義ではありましたが、心は満たされてはいませんでした。いつも、二つの道の前で悩んでいた気がします。

わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。（黙示録　3・15〜16）

そのような中途半端なまま大学を卒業して、就職のため埼玉へ移り住みました。そして春日部集会や吉祥寺集会で若い兄弟姉妹と交わる機会を数多く与

岩下由希子

えられ、これまで付き合ってきたこの世の友人たちと兄弟姉妹との間には何か違うものがある、と感じるようになりました。兄弟姉妹はどんなときにもイエス様にある希望を持っていました。倒れることのないイエス様という支えを持っている、と思いました。苦しいなかでもともに喜びあい、励ましあい、祈りあっている兄弟姉妹の姿を見た私は、イエス様を知っている、知らないで、こんなにも違うのかと愕然としたことを覚えています。そして仕事での悩みもあり、私も主の恵みのうちに入れていただきたい、と思うようになりました。

そして私は自分自身の罪についてはっきりと示されました。ある兄弟が、「実はね、君が大学入学するとき、お父さんの勤めている会社が先行き見えない大きな試練のなかにあったのだよ。そのなかであなたは大学に行かせてもらえていたのだよ」と教えてくださいました。私は当時、会社がそのような状態にあったことを知らされてはいませんでした。進学を当たり前のように思い、感謝もしていませんでした。そのようななかで、私の罪のために「一人で生きて行きなさい」と言った両親の気持ちはどれほどだったのでしょう。私には想像もつかないほど辛かったことでしょう。きっと両親の前にも二つの道があり、そのなかで両親が迷わずイエス様の道をとってくれたことは、イエス様が私たち家族の中心にいてくださったからだと思います。

私が自分の道を走っているとき、多くの兄弟姉妹から手紙やメールを通してみことばをいただいていました。あとで知りましたが、兄弟姉妹や兄は祈り会でも祈ってくださっていたそうです。私は返信どころか、連絡を取ることを止めたい、とまで思っていました。イエス様を通してではなく、人間的な部分でしか兄弟姉妹を見ていなかったのです。私は自分の罪にはっきりと目が覚めました。私はいつも自分・自分・自分でした。多くの兄弟姉妹に祈っていただいたうえでここまで守られてきたことをはっきりと示されました。本当にこの場をお借りして謝りたいと思います。そして本当に祈ってくださりありがとうございました。

埼玉では三年間、兄とともに生活しました。甘ったれで、わがままな私ですから、よく兄に迷惑かけていました。そんななか、ベック兄がある姉妹に「相手のことを許せないときあるでしょう?でもね、たとえ100%のうち99%相手が悪くても、そのなかの1%は自分だよ。そのことを、あなたはイエス様と相手に謝れますか」と言われた、と聞きました。私は目からうろこが落ちる思いでした。イエス様にとっては、1%の私の罪が問題だったのです。イエス様はなにを望んでおられるのか、何を喜ばれるのか、それがすべての基準であると知りました。ただ、やはりイエス様に対してはごめんなさいが言えても人に対してなかなか言えません。この三年間、兄と生活するなかで最後の最後まで訓練でした。しかし、本当に必要なことを示していただいた感謝なときでした。きっとこれからも訓練されると思いますが、いつも初めにかえって主の喜ばれる道を選んで行きたいと切に願っています。

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。

（エペソ　5・8、10）

今は、兄とは離れ埼玉で一人暮らしをしています。最近は仕事を通して様々な試練を与えられています。仕事で落ち込み、泣くこともありますが、そのようなときイエス様はいつも必要な交わり、みことばとメッセージをそっとサプライズプレゼントのように

岩下由希子

置いてくださっています。今の状況は決して良いものではありませんが、イエス様にあって平安のうちにすべての物をいただいている、と確信できるから感謝です。

イエスは三度ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロは、イエスが三度「あなたはわたしを愛しますか。」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ。あなたはいっさいのことをご存知です。あなたは、私があなたを愛することを知っておいでになります。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」（ヨハネ　21・17）

きっと天国に行ったときにはイエス様から「ゆきこ、よく来たね。ゆきこは、わたしを愛しますか」と言われるのではないかと思います。そして私は、ペテロのように「はい、愛します！」と返事をするのでしょう。きっとそのあとは、イエス様が手を伸ばしてくださり優しい抱擁が待っているに違いありません。そう思うと胸が熱くなります。本当に楽しみです。

イエス様、大好きです。本当にこのような私を救っていただいてありがとうございます。私の罪をなくすために十字架で死んで、またよみがえってくださったことに心から感謝します。これからもいろいろな道のりを歩んでいくと思いますが、大好きな主にある家族とともに心を一つにし、イエス様だけを見上げて喜びながら走っていきたいと、強く願ってこれからも祈り続けたいと思います。ありがとうございました。

岩下　由希子
一九八五年長野県生まれ　長野県篠ノ井高校、北陸大学薬学部卒。父　健次、母　伊津子、兄　慧夫　淳一



喜びのうちに天国へ　父の救いの恵み

高山　洋子



右が洋子さん、娘の英子さんと

イスラエルよ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。アロンの家よ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。主を恐れる者たちよ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。主はわれらを御心に留められた。主は祝福してくださる。（詩篇　115・9～12）

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。（詩篇　103・2）

二十年前に、一人娘の不登校、夫への不満、離婚したくてもする行動力もなく不満だらけの絶望のなかにいた私をイエス様は救ってくださり、娘も主人もイエス様の家族としていただきました。

集会に集い始めて十年の間に、高山の母、父そして主人も召されて、集会で三度の葬儀、三度の納骨式、一度の秋田での記念会をしていただきました。

主人が召されて十年、イエス様の恵みと憐れみのなか、試練や苦しみもありましたが、イエス様に「あなた様はどのようにしてくださるのですか？」と信頼して祈るとき、必ず導きを与えてくださり、進むべき道を教えていただきました。今回、父の救いについてお証しします。親族間のやりとりは、そのまま（秋田弁）を書かせていただきました。

両親は秋田県の小坂という鉱山町で生まれ、私と妹を育ててくれました。四年前の健康診断で、父は肺がんと宣告され、岩手医大で手術を受けることになり、その準備として禁煙をすることになりました。一日二箱も吸っていたニコチン中毒の父は、肺がんと宣告された不安と禁煙から、タバコのかわりにどんどんお酒を飲み、手術までの一ヶ月半の間にアル中になってしまいました。

母は対応に困っていたので、私は仕事の都合をつけ、金曜日から月曜日まで秋田に行き、火曜日に帰

京、水、木と仕事をする生活にしました。秋田への行き帰りの新幹線で聖書をひらくと、何度となく次のみことばが出てきました。

あなたを生んだ父の言うことを聞け。あなたの年老いた母をさげすんではならない。真理を買え。それを売ってはならない。知恵と訓戒と悟りも。正しい者の父は大いに楽しみ、知恵のある子を生んだ者はその子を喜ぶ。あなたの父と母を喜ばせ、あなたを産んだ母を楽しませよ。（箴言　23・22〜25）

父は、飲んで酔っぱらっているか、寝ているかの生活でした。アル中のすごさを知りましたが、どうすることもできません。父の行動に振り回され、母も私も疲れ果てました。

お酒の勢いが増していくと、知能、抑制などがどんどん衰えていきます。父のみじめな姿を見て、以前の父はもういないと思うと、胸が張り裂けそうになりました。母はいつも張り詰めていて、病的になっていきました。もう祈りしかありませんでした。多くの姉妹にメールを逐一送信し、祈ってもらいました。

このような状況で、改めて母にイエス様を具体的に伝えたいと祈り、「母さん、みじめじゃない？何十年も暮らしてきた結婚生活の結末がこの状態だよ。私も自分に失望し、みじめな者だと思ったから、イエス様に祈ったんだよ。母さんもお祈りするしかねんでねが？」と言うと、母は「んだー、みじめだ」と言って涙ぐみ、いっしょに素直にイエス様に助けてくださいと祈りました。

現実をみると、父は泥酔状態で病院にも行けない、手術も無理、母もつぶれてしまいそう、とあせるばかりでした。そんなとき、秋田に向かう新幹線のなかで、みことばをいただきました。

したがって、事は人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。（ローマ　9・16）

このときから、このみことばは光のように、父に関わるすべての方向を指し示してくださいました。以前、主人の召されたときもどうしようと思うことがたびたびありましたが、「イエス様、どうしてくださるのですか？」と祈ると、必ず導きをくださいました。このときのことを思い出し、父のことも主が導いてくださると確信しました。

その後、次々とおどろくような導きがありました。まず、病院から電話がかかってきたとき、酔っぱらっていた父が電話に出て「手術は断る」と言ってしまったのです。しかし、その数日前に、父の飲酒について病院に相談をしていましたので、父の返事のし方から病院は早急な対応が必要と判断し、入院を早めてくれました。このとき、母は妹に、「もしかせば、お祈りしてだがら、入院が早ぐなったんだべが？」と言っていたそうです。

肺がんの手術は終わったのですが、手術から一週間ちょっとでアル中の禁断症状が出たため、「対応がたいへんなので、傷のチューブが抜けたらすぐに退院するように」と言われました。ここで退院したら、また飲酒が始まります。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

妹と母が先生に相談したところ、特例で精神病棟

に移してくださることになりました。しかし、母と妹は、初めて触れる精神病棟の独特な雰囲気に、こんなところに父さんを入れてよかったのかと悩み、東京にいる私にも妹から電話がかかってきました。

妹に、「精神科に入れたことを悪いと思うなら、イエス様に、『ごめんなさい、父さんをこんなところに入れてしまいました。ごめんなさい』と祈ったらいいよ。そしたらイエス様はゆるしてくれるよ。そのためにイエス様は十字架にかかられたんだよ。一ヶ月まえ、家で酔っぱらった父さんを、お酒から解放されるために精神科に入れたらいいのにと皆が望んでいたじゃない。今そうなったんだから、よかったと思うだけでいいよ。たくさんの人にお祈りしてもらったおかげでこうなったことだから、悔いることなんかないよ。一番いいようになってるんだから」と答えました。妹は泣きながら「わかった、お祈りする」と言いました。

その日から毎日、母と妹は二人で「日々の光」を読んで、お祈りしたそうです。家族三人が、ひとつになり、父のために祈る日々でした。

父は、お金もなく、テレビもなく、外出もできない精神病棟でどんどん砕かれていきました。まともに字も書けないような状態のなかで、ノートに「孤独」、「これからの生きかた」、「娘に対する悔いることば」、「自分は変わらなければいけない人間であること」、「母に迷惑をかけていること」、などと乱れた字で書き記していました。その後アルコールが抜けていくと、父はどんどん穏やかに変わっていきました。

ちょうどそのころ、ベック兄が盛岡キャンプにいらっしゃったときに、父を病院に見舞ってくださいました。父は、それまでに葬儀やお見舞いなどで六回もベック兄にお会いしていましたから、このときも本当にうれしそうでした。そしてこのとき父は、

ベック兄の前で真顔で、「ヨッコ、おめは自分の信仰を全うせよ、守りとうせよ」と言いました。なぜだったのか、不思議でした。

秋になり、父は「いづまでここで暮さねばねんだべが。ここで死ぬまでいねばねのが?」という苦悩をノートに書いていました。可哀そうだな、と思わされ、「イエス様、父にことばではもう伝えきれません。どうかイエス様がおられることを父がはっきり知れるようにしてください」と祈り始めました。

それからまもなく、父が突然に思い出したように、「ヨッコ、おめさ、話すごとあった。昨日夢さ、白い服着た人が天を指差してでできたんだよなー」って、ポーズをするのです。私はびっくりしましたが、この日を境に、祈ってるよと私が言うと、父は「祈ってけれ、ほんとに祈ってけれ、頼むや」と乞うようになったのです。顔の表情も変わり、父は本当に変わっていきました。もう、家に帰ってもいいのでは、もう十分のときを与えられたのではと思い、みこころの日に、家族皆が喜べるときに退院をと祈りました。

まもなくして秋田に帰ることができました。退院前に精神科の主治医から「決してお酒を飲ませないこと、お金も渡さないように、飲んだら連続飲酒に必ずなる」と言われていたので、皆緊張していたのですが、退院した日の夜、イエス様からすばらしい恵みのときを与えていただきました。夕飯のとき、「父さん、ご飯だよ」と呼ぶと、台所に来るなり、突然、「ヨッコ、ベックさんのお祈りしてけれ」と涙ながらに言うのです。妹は、大きな声で「父さん」と驚き叫び、母も「あやー、父さん」と言って泣きました。私は、何をどう祈ったか忘れてしまいましたが、感謝でいっぱいになりました。家族皆で涙を流して、イエス様の前にこうべを垂れて祈りのときとなりました。

父は、私の祈りではもの足りなかったらしく、父

さんも祈ると言い、涙ながらにありがたいと祈りました。そして、私と妹に手紙を書いてたからと言い、それを読んでくれました。「姉妹の二人に、何年ぶりの四人そろってのご飯を食べるなんて、考えてもみなかった。本当にうれしいと思う。こんなことが、またとあるなと思うと、本当に父さんはうれしいと思う。本当にうれしい、楽しいで感激してほんとうに泣きたいぐらいうれしい、本当の気持である。おわり、あとはへんになるからやめます。とうさんより」（父のことばそのままなので、変な文ですが）。

精神科でアルツハイマーであると言われました。ときどき、酒買ってこいというのですが、少しほかの場所に退いていると、忘れるのかあきらめるのかそれ以上言うことなく、本当に守られました。主の憐れみとしか言えません。父は、召されるまでお酒を口にすることはありませんでした。

両親は二人で楽しそうに日々を暮らし、一日おきの父の「デイ・サービス」が会話の中心となりました。母は、お酒を飲まなくなった父と新たな夫婦関係に入り、本当に幸せになったと思います。

母が自分の物忘れを感じ、なさけないと落ち込み、父に「こんたオラだば、父さんの世話でぎねべ」と、弱い自分を父に見せたら、父が「なんもだ、オレど一緒に二人で精神病院さ行げばいいだげだべ」とやさしく言ってくれたのを、母は「父さんに慰めでもらったんだえ」と、涙ぐみながら、嬉しそうに喜んでいました。

この年から私と娘の英子は秋田で年越しを過ごすようなりました。英子は「おじいちゃんも、おばあちゃんも楽しそう。秋田に小さい頃から行っていたけど、今までで一番楽しそうに穏やかに暮らしてるね」と言っていました。その後も毎月、妹か私が秋田に行きました。

そんななかで、私は父とのいくつかのうれしい会話がありました。日曜日、私が盛岡の礼拝に行こうかなと言っていると、父が大まじめに「それだば、あそごでいいのや」と指差すのです。「なに?」と聞くと、指の方角はトイレです。そこには、みことばのカレンダーがあり、父が入院したときから毎日、母が忘れることなく日めくりしてみことばが掛けられていました。「オラえの家の教会はトイレなんで」とも言ってました。

私の祈りに、「オメのお祈りはダメダで」とダメ出しをしたりもしました。「もっと、はっきりしねばだめや」と言い、「んだら、父さんは、なんて祈るのよ」と聞いたら、胸の前で手を合わせて、頭を下げて「ごめん」と一言、祈りました。それでも、父にそれ以上、イエス様のことを言うと、「オメはオメの信仰を全うせばええのや、人にはそれぞれあるんだがらな」と言い、歯がゆいような日々が続きました。

一年半前に脳梗塞で倒れて介護施設に入りました。年が明けると食欲がなくなり、胃ろうをするしかないので、入院することになりました。四月半ば、息絶え絶えで生きている父に、祈って、話しました。「父さん、もう少ししたら、死ぬときが来るがもしれねよ。そのときに父さんの前さ、イエス様が必ず現れるんだがらな、そしらた、ごめんなさいって言うんだや」と言ったら、「はーい」と答えました。「高山お父さん、お母さん、パパも、皆天国にいるから。母さんも、オラがたも皆行ぐから、安心して行げばいいんだがら、解ったが」と言うと、また「はーい」と答えました。まるで霊だけが生きているようでした。

私は入院を見とどけ、東京に帰りました。これから胃ろうをして、百才までも生きることになる人もいるけどーと、少し思い煩う気持ちを持ちつつ、また来るからと別れましたが、イエス様は本当に最善

のときに、父をあっという間に迎え入れてくださいました。

父の告別式のとき、雨も降ってないのにきれいな虹がまっすぐに出ました。主人が危篤のときも、病院からの帰り道で高速道路の上に大きな美しい虹が二重にかかったことを思い出し、父は天国だと確信し、感謝しました。同時に、この十年、主の守りのうちにあったことを感謝し、希望がわきあがりました。

わたしとあなたがた、およびあなたがたといっしょにいるすべての生き物との間に、わたしが代々永遠にわたって結ぶ契約のしるしは、これである。わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を起こすとき、虹が雲の中に現われる。虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約を思い出そう。（創世記　9・12〜14・16）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

高山洋子
一九五五年、秋田県小坂町生まれ
秋田県立小坂高校、東京スクールオブビジネス、
(株)ヤナセ勤務を経て、現在、国際基督教大学でパートタイム
家族　夫　善明（二〇〇一年　昇天）
長女　英子



結婚式でのあかし

サイ・チェンシェン
蔡 健昇



妻の灯さんと

本日は、皆様がここ長野県御代田の福音センターに集まってくださり、主の導きと祝福のなかで、私たち二人の結婚式を挙げることができましたことを心から感謝します。

私は台湾の南部都市、台南で生まれました。台南は日本の京都のような伝統文化と歴史の古都であり、民族性も情熱的、保守的で善良です。

私の家は父母と兄の小さな家族です。とても親密で、なんでも話せて、なにかをする時はいつも一緒でした。私は小さい頃から外で遊ぶことが大好きで、夕方遅くまで遊びまわり、時には友達の家に泊めてもらって、母に叱られたこともありました。両親はいつも仕事に熱心で家を支えてくれていました。

私は勉強不足もあって、高校は志望校には入れなかったのですが、このことで両親は小言を言うようなことはなく、むしろ人の役に立てるような人間になり、決して悪に走らないように、とだけ願ってくれていました。主がこんな素晴らしい両親を与えてくださったことに感謝に堪えません。高校を卒業してからは、一転して遊びまわることは止め、がんばって少しでも良い大学に入りたいと思うようになり、予備校を探し、大学入試の準備をしました。一年後には、有名校といわれる大学に合格し、家族は心から喜んでくれました。大学を卒業、一年間の兵役を終えてから、将来の仕事に備えてアメリカで英語を勉強したい、と父に伝えました。そのときは二十六歳で、まだイエス様には出会っていませんでした。まして主が私の生活と将来を導いておられたことなど思いもよりませんでした。イエス様は西洋の物語でしかなく、映画で見たことがあるという程度の事でした。

しかし、わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、その時が来れば、わたしがそれについて話し

たことを、あなたがたが思い出すためです。わたしが初めからこれらのことをあなたがたに話さなかったのは、わたしがあなたがたといっしょにいたからです。

（ヨハネ　16・4）

しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。

（ヨハネ　16・13）

この二つの聖句は私が後になって示されたものです。また、主イエス様が私になされた奇跡の一つです。いつもイエス様は私たちのかたわらにおられ、先に立っておられ、すべてを成してくださいます。そのことは後になって知り、感謝でいっぱいになるのです。

もう一つお話ししたいのは、次の例です。私が勉強のためアメリカに到着した第一日目、最初に話をした人が灯（あかり）さんだったのです。灯さんはアメリカで最初に友人になった人でした。神様の不思議な導きであったと思います。その時はまだイエス様と出会ってはいませんでしたけれども。

二か月ほど経ったある時、灯さんがジーザス（イエス）という名前を口にしたのを聞いて、とても興味を惹かれました。それである時、灯さんにジーザスって誰？どんな綴りなのと聞きました。でもその時は、灯さんはイエス様の話しはもなかったのですが、そのことで、かえって好奇心が湧いてきました。

私があまりに何度も聞くものですから、ある時学校の図書館で、灯さんは英語の聖書を持ち出してきて聖書を一緒に読んでくれました。そこには人は知らず知らずのうちに罪を犯す者であり、もともと罪人であると書いてありました。読み終わると私の感情が急に高まるように感じました。なぜなら世界中の人は誰もが自分勝手で、いつも心のなかから出てくるもの、あるいは行動に現われるものは罪悪であると感じていたので、もし本当に聖書に書いてある通りであるなら、私たちはこの世でどのように生きればいいのか、と思ったのです。その時、私の反応を見て、灯さんはびっくりしたようでした。私の心には大きな疑問が湧いてきました。灯さんはその時、灯さんのご両親にその疑問を聞いてみようと言ってくれました。

一日経ってから、灯さんのお父さんがすぐに聖書のみことばを送ってくれました。イエス様を信じる者は罪のなかにあっても救われるというもので、その時は灯さんのご両親がこの聖句を伝えてくれたことにとても感謝しました。この聖句によって私は安心と平安を得たのです。

こんなことがあってから、私は聖書の言葉に惹かれるようになり、楽しくて次々と読んでいきました。灯さんが中国語と英語の聖書を買って読むように薦めてくれて、その頃から一緒に聖書を読む機会を作ってくれて今も続いています。聖書を手にしてから、灯さんがネットで聞く礼拝に一緒に参加するように薦めてくれました。世界各地の兄弟姉妹たちがネットでつながる集会です。これが私にとって初めての集会での交わりであり、自分でイエス様を賛美した最初でした。

数か月後、私たちはアメリカでの勉強を終えて帰国する予定でしたが、灯さんが、その前に、カナダで持たれるバイブルキャンプに一緒に参加しようと誘ってくれました。これがイエス様にお会いする奇跡の機会となりました。このキャンプでは、多くの初対面の兄弟姉妹とお会いしたのですが、誰も知らないうえに日本語も通じないということで、初めのうちは心配と緊張ではち切れそうでした。でも、みんなの心と唇には共通の聖霊であるイエス様がおられました。

みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだした。

（使徒　2・4）

兄弟姉妹たちは、コミュニケーションが不十分な状況でも喜んで私を助けてくださり、交わってくださいました。これこそは主イエス様の恵みであり、私の緊張をほぐしてくれました。さらに、これからどのようなことが起こるのだろうかと期待すら湧いてきて、本当に嬉しくなり主に感謝しました。

二日目に、初参加で日本語が話せないということで、ベック兄が個人的に話しをしてくださいました。イエス・キリストの絶妙なお導きでした。この時ベック兄は小冊子の Bible Versus（聖書のみことば集）をくださいました。そして、イエス様がどのように私たちの罪を消し去ってくださるか、罪のなかから救われるとはどういうことか、ということに関するみことばを先ず読むようにとおっしゃいました。

そして女に、「あなたの罪は赦されています。」と言われた。

（ルカ　7・48）

なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。

（ヘブル　8・12）

わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。

（ヘブル　10・17）

この他にも、まだ多くの関連聖句がありますが、私はとても嬉しく、むしろ驚いていました。

私たちは初対面であるにも関わらず、ベック兄はその頃の私が最も知りたかったことをご存じであったかのようでした。このことがあって、私は完全に安心と平安を得たのです。そして、私はイエス・キリストの万能と慈しみをほめたたえました。

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。

（1コリント　13・4〜7）

これが私の一番好きな聖句です。主は人間にとって最も重要なものはなにかを教えてくださいます。主がなさった奇跡によって、主の素晴らしい愛は、日本や台湾の家族や集会の兄弟姉妹と友人たちを通して表わされたものであること、主の愛は世界のすべての人に与えられているので、主の愛の存在を感じ取ることができる、ということがはっきり分かりました。

カナダのキャンプが終わった後、私は灯さんと一緒に日本に行き、灯さんの家族と初めてお会いしました。また、お誘いを受けて家庭集会や日曜日の市川集会にも参加し、日本でイエス様がなされたたくさんの奇跡を体験する機会を得ました。

一方で、初めのうちはなぜ毎週集会に行くのか、集会後はどうして毎回のように兄弟姉妹との交わりを持つのか理解できませんでした。ただイエス様を信じていることだけではいけないのか？その頃はこんな疑問を心のなかで何度も繰り返していました。でも、一回、二回と重ねて参加するうちに、答えが与えられました。それはこの時期こそイエス様が私たちのために備えてくださった大切な時間なのだということ、集会に参加し、交わりをしている時間だけが、私たちが世の中の苦悩・不自由さを忘れることができ、イエス様とともにいるという思いに満た

され、イエス様が聖書で語られるみことばについて語り合い、主イエス様が兄弟姉妹一人ひとりになされた奇跡の証しを分かちあう時間である、ということに気づいたのです。

そのあとは東京の家庭集会や吉祥寺の集会、軽井沢のキャンプなどにも、灯さんと続けて参加することができました。一人ひとりが皆イエス様の慈しみやイエス様がなされたことについて分かちあうことの喜び、聖書のみことばに心動かされること、これら総てにもう一度イエス様に感謝したいと思います。また、このことを通して私自身が霊的に成長できたことに感謝します。

またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。（ローマ　5・2〜5）

望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。（ローマ　12・12）

日本での集会に参加した後、私は上海で一年あまり仕事をしました。イエス様は仕事を通じてイエス様ご自身との出会の機会を与えてくださいました。さらに、上海で張兄弟・泉姉妹ご夫妻にお会いできたこと、また、張兄弟のお宅で開かれている礼拝と福音集会に参加し、上海でも主のみことばを聞くことができました。本当に素晴らしいことです。仕事上でもどんな困難や挫折にぶつかっても、イエス様はいつも私がイエス様に祈れるようにしてくださいます。いつも私のそばにいてくださり、どんな時も私を導き助けてくださいます。

イエス様に祈ることを忘れさえしなければ、祈りだけが主に喜んでいただけることですから、私たちの心に希望と喜びを与えてくださり、忍耐と悔い改めへと導き、私たちがたとえどんなに苦しい環境のなかでも喜んで成長するようにと導いてくださいます。これが主が私たちの心のうちになされる奇跡であり、このことによって、私たち一人ひとりの人生に主がいつまでも共にいてくださることを信じられるのです。

最後に、いつもずっと助け支えてくださった、こんなに素晴らしい家族を私と灯さんに与えてくださった主に感謝します。また、このことは主イエス様が私たちの人生に与えてくださった最も大切な助けだったと感謝しています。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

兄弟姉妹が私たちのために毎日毎日主に祈ってくださったことを、心から感謝します。また、主の慈しみと愛が私と灯さんの家族や兄弟姉妹、友人たちの上に豊かにありますように祈ります。ありがとうございました。

蔡　健昇
台南市仁徳国小、台南市復興国中、台南市慈幼商工、高雄市国市高雄第一科技大学
アメリカ　サンディエゴSDSU　ALI　語学留学
上海　CASACHINA（貿易関係）勤務
妻　灯

結婚式でのあかし

会沢 灯（あいざわ あかり）



ご家族と

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。（詩篇 119・105）

この聖書のみことばから私の名前は与えられました。私はクリスチャンホームで育ち、食事の前のお祈りや日曜日の礼拝、月に一度行なわれる我が家での家庭集会は生活の一部でした。兄弟姉妹に慣れ親しみ、イエス様へのお祈りもあたりまえのことでした。

学生時代は、先生、友だちに恵まれ、いつも楽しく過ごしていました。しかしその反面、自分はなぜ生きているのかと考えるようにもなり、「イエス様に生きる理由を教えてください」と泣きながら祈ったことを覚えています。思春期になると、周りの友だちとの違いに敏感になり、イエス様を信じていることを隠すようになりました。しかし、心のなかにはいつもイエス様がいて、どんなこともイエス様に聞き、祈りながら歩んでいきました。

そんな私がイエス様に疑問を持ち始めたのは、就職してからです。私は歯科衛生士の仕事をしていました。歯科医院の狭い人間関係やこの世の常識などが、私には受け入れられず、なぜ？なぜこうなるの？と苦しみ始めました。

毎朝仕事場のドアを開ける前には、イエス様、今日もあなたが私の体も心も支配して働いてくださいと祈り、仕事が終わると、イエス様、今日も終わりました、ありがとうございます！！と解放感に満ち、最寄りの駅から家まではイエス様と話しながら帰りました。この時間が唯一のリラックス時間でした。それでも、日に日に不満がたまり、イエス様に、なぜ私ばかりこんなに辛いのですか、生きていても楽しいことがありません、と嘆くようになっていきました。

話しは前後しますが、小さな頃からキリスト集会に集っていた私は、思春期になって兄弟姉妹から「救

われていて、いいね」と頻繁に言われるようになりました。私は救われるとはどういうことなのか、まったくわからず、「ただ信じているだけです」と答えていました。そして、救われているのかどうか自分でもわからず、いつも歯がゆく、ダイレクトに教えてくれないイエス様に、徐々にふてくされていきました。

また兄弟姉妹が、集会で「感謝です」と喜んでいるのが信じられず、イエス様にも反抗的になり始め、宣教師のベック兄に、「イエス様がむかつくことはありますか?」と尋ねたこともありました。その時ベック兄は非常に驚いて目を丸くしていましたが、「一度もない」とはっきり答えてくださいました。

その後、ある日曜日、礼拝に行かなかった私は、その理由を親に聞かれ、「行きたくないから行かなかった、礼拝はどこでもできるし、なんのために行くのかわからない」と答えました。実際、私の日曜礼拝は親に怒られないために行く、というただの習慣にすぎませんでした。

そのとき父は「灯はまだ救われてないのかもしれないな」と言いました。その言葉が引っかかり、私は救われているかわからないと、正直に言ってきたのに理解してくれていないことへのショックと、なんど祈っても願いを聞いてくれないイエス様への不満が重なり、親と人生に絶望しました。私のなかのイエス様は消え、同時に自殺願望が生じました。死にたいけれど地獄へ行くのは怖い、毎日が葛藤で、約一年間、暗闇をさまよい続けました。だれとも話さず、頭のなかは死のことばかり、悲しみの限界にきたとき、私は叫ばずにはいられませんでした。「どうしてこんなに辛いことばかりなのですか?イエス様、あなたは本当に本当にいるのですか?いるなら、いま救ってください、助けてください、死にたいくらい辛いのです」と、すべての悲しみをイエス様に

打ち明け、泣きながら必死で祈りました。

その後、どのようにしてかは思い出せませんが、心の隅に消えてしまっていたイエス様はよみがえられ、私は知らぬ間に光のなかへ引き出されて行きました。我が家の家庭集会では、ベックさんの声を慕い、あるときは兄弟姉妹のお宅でのお交わりを通して、私はすでに救われていることを教えてもらいました。その後の日曜礼拝で初めて、聖餐のパンをイエス様の身体だと思い、ぶどうジュースを血潮だと感謝していただくことができました。

そして私はどんどんイエス様と生きる喜びを体験していきます。イエス様、救ってくださりありがとうございます、あなたが私のために死んでくださり、今この瞬間も見守っていてくださることを心から感謝します。今まで文句ばかり言ってごめんなさいと祈り、私は本気であなたを信じたいですと熱心に祈るようになっていました。

イエス様によって造りかえられた私は、四年目に退職し、アメリカに留学しました。アメリカ留学は、私の夢で、勤めていた四年間、何度も退職願いを出しました。最後はあきらめ、留学はどちらでもいいです、と祈り始めたところ、道が開かれました。この四年間は忍耐を鍛えられた時でした。

渡米後、語学学校でチェンと出会い、そのほかの友達たちとも仲良くなりました。ある日私は、留学できたことがとても嬉しく、留学できたのは、イエス様が計画して、私の祈りを聞いてくれたからなんだよ、と自然の流れでチェンに話していました。それを聞いた彼は「イエス様ってなに?」と聞いてきました。この急な質問に私は「なにって、なんだろう」と言葉が出てこず、「インターネットでJESUSと検索すれば出てくるよ」と、とんでもないことを言っていました。このとき、私は自分がイエス様のことをよく知らないと気づき、イエス様、

あなたのことをよりよく教えてくださいと祈りました。

その後、彼には自分の体験やなにを祈っているのかを話すようになりましたが、なにを彼に伝えればいいかわからず、両親に相談しました。すると両親は、「灯の話しを聞いていると、イエス様をなんでも聞いてくださるご利益の神様と思っているみたいだね」と言われ、「一番大切なのは、私たちの罪のために十字架上で死なれ、三日目によみがえって今も生きておられることだよ」とのアドバイスをもらいました。私はこれを聞いて大きなショックを受けました。私自身、罪と言われても、まだまだわかっておらず、私は彼に誤解させてしまったと不安になり、イエス様、ごめんなさい、間違えたことを言ってしまいました、どうかイエス様が直接彼に語ってくださいと一晩中祈りました。

その次の日、私たちはすでに罪人であること、そのためにイエス様が十字架で死んでくださったこと、だから私たちはイエス様に悔い改め、また、感謝していることなど、を祈りつつ、彼に話しました。話しを聞いていた彼は、ものすごい衝撃を受け、顔はこわばり、怒っているようでした。私は驚き、「どうしたの？大丈夫？？」と聞くと、彼は「受け入れられない、自分がすでに罪人であり、イエス様に対して、なにもできないなんて、ひどすぎる。僕は悪いことはしないようにして生きてきた。それなのに罪があるなんて心が痛い、痛すぎる。どうすればいいの？」と今にも泣きだしそうでした。私は慌てて「大丈夫、大丈夫だよ、イエス様が助けてくれるよ。私も祈っているから」と、どうにか彼を慰めましたが、彼は完全に放心状態で、家まで帰れないのではないかと心配したほどでした。私は、イエス様に、どうかチェンを励まし、また彼の疑問に直接答えてくださいと祈り、急いで彼に贈るみことばを探しました。

もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

（ローマ　10・9～10）

その後、私は彼をイエス様に託し、そっとしておきました。そしてイエス様は、私の知らないうちに彼を救い、彼は自分でイエス様を探し出し、イエス様を信じるものとなっていきました。

結婚については、彼ははじめから私を結婚相手として見ていました。私はそんな彼に対して、イエス様が私にとって一番で、あなたを好きという感情は明日にも変わるかもしれない、だからイエス様なしであなたを好きでいることもできない、とはっきり伝え、結婚相手かどうかお互いイエス様に聞いていこう、と話しました。

しかし、結婚というものが漠然としていた私は、彼の真剣な態度についていくことができず、彼を悲しませることも多々ありました。私はイエス様に、彼が本当にあばら骨を分けた相手ですか、わからないから聖書のみことばで教えてくださいと祈り続けました。

あなたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の主。

（イザヤ　54・5）

このみことばに惹きつけられ、以前結婚について祈ったことを思い出しました。「もし、私が結婚するのであれば、相手はイエス様みたいな人で、毎日毎日イエス様の話しをして、いつでもどこでも祈るのです。そしてできたら外国人で海外に住みたいで

す」と確かに祈っていました。そして、この祈りは本当に聞かれました。

彼と共に祈り、聖書を読むようなり、また世界中の兄弟姉妹とのインターネット礼拝に参加するようになってから、彼は以前にもまして、輝くようになっていきました。日本語での礼拝、メッセージは彼にとって、つまらないものと思いきや、彼は毎回興奮して、「今日もよかった」「早く兄弟姉妹と一緒に礼拝して祈りたい」「早く聖餐のパンと血にあずかりたい」とはしゃいでいました。

また天国についても彼はよく話し、「死んだ後も天国でイエス様と共に永遠に生きていけるなんてすごいね」と感動し、感謝の祈りをささげていました。そんな彼の純粋さを尊敬しつつ、彼をうらやみ、次第に自分と比べ始め、自分のみじめさや心の狭さ、愛のなさなど、心の内側を見せられていきました。彼といることが非常にきゅうくつで、何度も離れようと試みました。しかし、彼の中のイエス様にだんだんと引かれていき、気がつくと、共に祈りたい、祈りで彼を支えたいと思うようになっていました。文化も、習慣も、言葉も違う彼とすれ違いながらも、ここまで来たのは、まさにイエス様の奇跡だと、日々感じています。

最後に家族について話します。私の家族はとても仲がよく、どこに行くにも家族いっしょ、なんでも話し、イエス様のことが毎日話題に出ます。四姉妹である私たちはそれぞれがイエス様と出会い、イエス様を体験し、辛いときには祈り合い、喜びを共有し、試練のときを乗り越えて育ちました。

そんな家族に大きな変化が現れたのは、二年前くらいです。福岡へ転勤が決まった父の道広、福岡と千葉を行き来する母の美世子、仕事に忙殺される長女の希美（のぞみ）、病を与えられる次女の翼（つばさ）、台湾留学で新しい環境に入る私、看護学校に通い始めた妹の賛美（たたえ）。イエス様はそれぞれに違う試練を与え、みなに余裕がなくなり、私たちの心はばらばらになりました。とくに姉たちとはけんかが絶えず、常に裁き合い、口を利かぬ状態が続きました。イエス様に祈っても、私は強情で、自分の非を認めることができず、姉たちとの距離はどんどん広がり、家族の問題が次々に起こされ、私たち家族は崩壊状態でした。

そんな状態で、婚約式を迎えることになりましたが、このときには私は家族との意思疎通がうまくいっておらず、私の無責任で会沢家と蔡家の間に大きな誤解を与え、両家に多大な迷惑をかけてしまいました。自分ではどうしようもできず、婚約式の解消を本気で祈ったこともありました。しかしイエス様は、脱出の道を備えてくださり、また彼の両親と私の両親も、大きな愛で私を赦してくれました。

婚約式が終わったあとも、家族の中は微妙な空気が流れ続け、八月下旬、母の美世子に癌が発見されました。これを聞いたとき、私はイエス様から、「いい加減にしなさい、あなたはいつまで高ぶっているのか。あなたは家族をないがしろにしている。自分の姿を見なさい」と大声で怒られたようでした。

愚か者は自分の道を正しいと思う。
（箴言　12・15）

私は自分の正しさを主張し続け、高ぶり、家族を苦しめ続けていました。しまいには彼の家族をも巻き込んで問題を起こし、家族のみんなを傷つけてしまいました。いちばん大好きな家族、母を犠牲にまでしなくては、私は家族へもイエス様へも謝ることのできないどうしようもないものでした。家族みなで泣きながら悔い改めの祈りをし、私は、この自我を砕いてください、低くしてください、どうか家族

の関係を修復してください、と必死で祈りました。そして家族一人ひとりがイエス様によって鍛えられ、忍耐もできるようになっていきました。母に病いが与えられてから、私はこんな状況で結婚してもいいのですかと疑問に思え、「私はとても複雑な気持ちです」とイエス様に言い続けてきました。

あなたの父と母を喜ばせ、あなたを産んだ母を楽しませよ。（箴言　23・25）

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。（詩篇　115・1）

このみことばを読んだとき、私はこの結婚式はイエス様がしてくださると確信しました。私は、イエス様がいるから大丈夫と、このときから母をイエス様にまかせ、前を向いて歩けるようになりました。母は、イエス様がしてくださるから、私たちの気持ちではなく、イエス様にすべておまかせしようと言って、励ましてくれました。私たち家族はすべてのことがイエス様から起こされていると信じてはいても、ときにくじけ、不安定になることの繰り返しでした。

十月一日に行なわれた台湾での結婚式に母は出席できませんでした。今日の結婚式に家族全員がそろって出席できたことは本当に嬉しいです。私たちは、日本にいることが少なく、この結婚式は家族と兄弟姉妹のお祈り、ご奉仕に支えられて実現しました。飾られているお花、お茶やケーキ、みことばの名札など作られたものはすべて手作りで、いたるところにイエス様の香りと、兄弟姉妹の愛が満ちています。

蔡家の家族は、言葉がわからない私をあたたかく迎えてくれて、とっても感謝しています。いままで出会った数えきれないほど多くの兄弟姉妹、見えないところで働いてくださって本当にありがとうございます。また素晴らしい先生や多くの友人たちにも大変お世話になり、感謝しています。そしてどんなときにも祈り続け、どんなときにも励ましてくれ、イエス様を信ずる家族を作りあげてくれた父と母、よく笑いよくぶつかった姉ふたりと妹、家族全員が私の宝物です。

日本を離れても、お祈りでつながれるので、私はとても心強いです。イエス様という素晴らしいお方を、ひとりでも多くの人が信ずるように願ってお祈りしています。最後に聖書のみことばを読みます。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。（ピリピ　3・20）

私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。（ユダ　25）

今日は本当にありがとうございました。

会沢　灯
千葉市立園生小学校、千葉市立小中台中学校、
千葉県立磯辺高校、千葉県立衛生短期大学、
歯科医院勤務
アメリカ　サンディエゴSDSU　ALI　語学留学
台湾　台南成功大学語学学校留学
夫　蔡健昇

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

集会の出版物

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ（上・下巻）



ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと－ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ －私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を送料のみで配付しています。
お気軽にお申し込みください。



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第25号

2012年7月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
イラスト	向井則博
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。